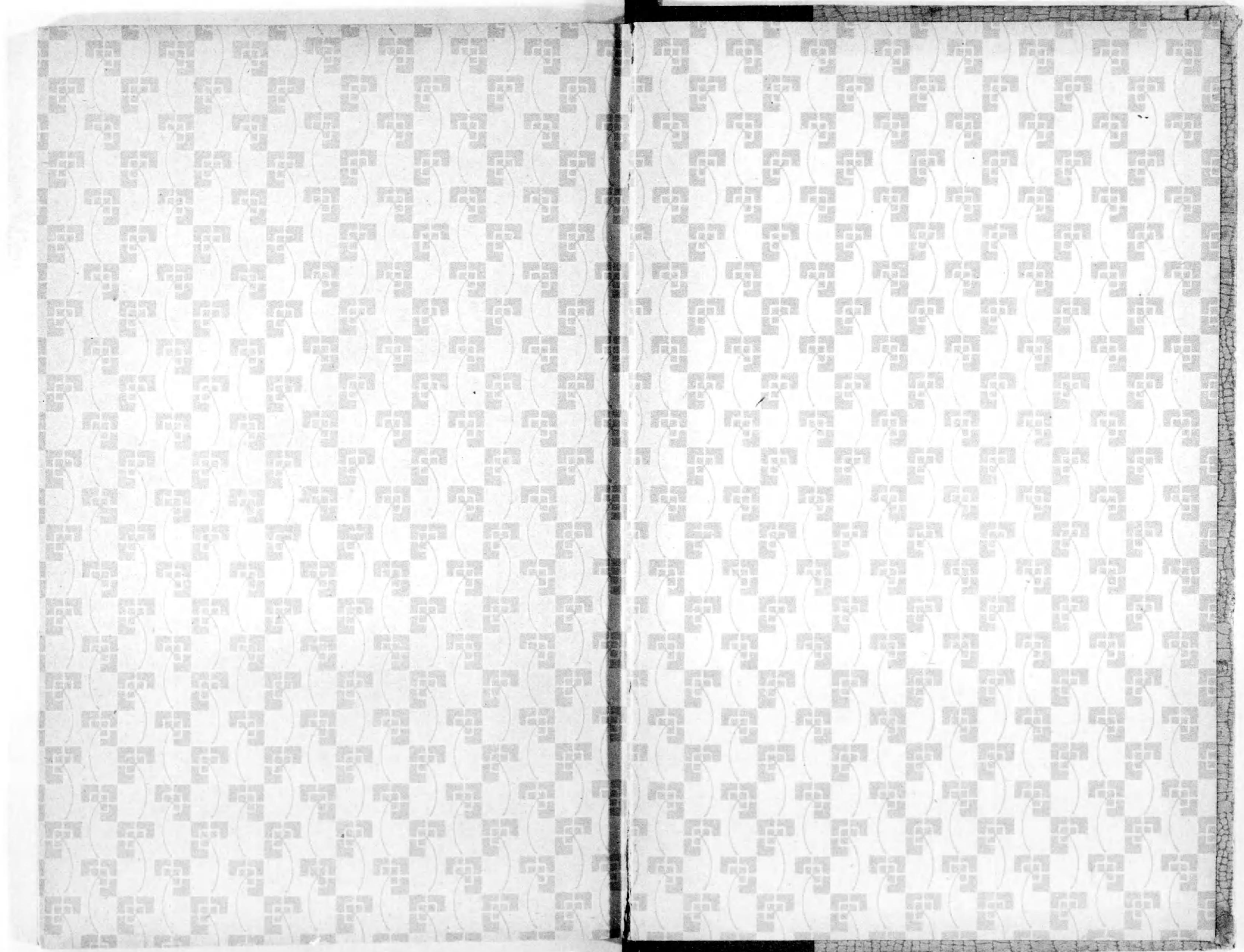


始





語物なとや

題長翰山林
序美有柳青
著記人婦聞新央中
著子してな



大正
4. 7. 23
内交



1086190

著者の肖像



<p>國家の発展 序文に在り したるは幸 の世に在り 敬愛す也 之を以て 高き 子に 大義</p>	<p> 海軍中 春成 だけ 大に 外務省 仙歌 幸先 艦隊 の 乃</p>
---	--

序

序

女は臆病だらうか？

一家破滅、これから愈々離散といふ間際になつて、甚く落ち付拂つて澄し返へるのは女である。甚麼せ斯うなつては仕方がありませんからネ、熊が丹田とやらに糞落付きに落付いてしまふ、野郎には之が得さぬ。

ミシ／＼、ガラ／＼、ミシ／＼ミシ／＼、そのら地震だぞ、とイの一番に周章で飛び出すものは、女でなうて野郎である。懼かり乍ら、そんなミシ／＼ガラ／＼ぐらゐの事にはビクともせず、南極あたりに大風でもあつたのか、と云つたやうな顔付で、糞落付きに落付き拂つて見せるのが女であ

る臆が丹田とやうにビタリ据つてしまふ。

結婚式も挙げぬうちに、お腹が大きくなつたと聞けば顔の色を變へて蒼くなるものは先づ野郎である女の方は寧ろ平然と、糞落付に落付いたもので、其盛せ出来たものは出来たて仕様が無いじゃアありませんか、と臆を丹田とやうに据えてしまふ。

蛙を視ても「如何しませう？」なんかと叫ぶ女の聲は偽善の聲である、虚偽の聲である。女は素と是れ夜叉の化身、大膽なのが其本來の面目である。虎穴に入つて虎子を得るのは、野郎共の願る遠巡する處だが、女は一寸躊躇するやうに見せかけても、一たび足を踏み出せば毅然として虎穴に猛進し、必ず虎兒を得て還へる。外面如菩薩内心如夜叉とは、お釋迦さま

も却々旨い事を申されたものだ。

視よ、夜叉面を装ふ野郎共の如何に意氣地無しなるかを。虎子を得んとして虎穴に入る野郎は概ね皆な虎に喰はれてしまふて無いか。木乃伊取の野郎で木乃伊にならぬもの、嗚呼夫れ幾干ぞ？魔窟探検なんかと柄にも無い大業な事を目論んだ御野郎の記者先生たちて、魔性の者に嘗められて一本の毛さへ無いツル／＼になつてしまはぬもの嗚呼夫れ幾人かある？だ。

是に至れば、野郎より尻の毛が一本半足らぬ半獸だとの評判ある女の方が遙に野郎よりも毛の多いものになる。野郎は持つて生れた澤山な尻の毛が一本半足らぬ女の手で、一本無しになるまで抜かれてしまふものだ。女

が偽善虚偽をやらすに、その本来の面目を發揮しなすれば、男は到底女の敵でない。一と睨み睨まれた丈けても、直ぐデリくと退却してしまはねばならなくなる。

○新聞の記者なてし子さんは、女記者である、女記者である。なてし子さんが初めて僕を僕の編輯局に訪ねられた時に居合せた僕の編輯局の野郎記者どもは、何れも口をアングリ開いて手の措く處を知らず、文子さんの美しいのに驚倒されて、尻の毛が大分抜けたやうであつた。

夫れ觀音經普門品第二十五に曰く、應に天龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、非人等の身を以て得度すべき者には即ち皆な之を現じて爲に説法す、と。菩薩のやうな女にはイザとなれば皆な身を夜

叉に現し、今の今まで蛙を怖がる顔付をしたものが、忽ち蛇の頭を碎くやうになる素質がある、元來この素質のある女記者のなてし子さんが、その美しい色身は或は夜叉に現し、或は雇女に現し、觀世音菩薩の名を口に稱じて雇女の魔窟に飛び込んだのだから堪らない、魔性のものならぬ僕の編輯局の野郎共さへ。一と目御姿を拜んだ丈けても尻の毛を抜かすまでのなてし子さんだ。況んや魔性のもの共が、忽ちに得度せられてしまふのは當然である。殊になてし子さんが手に携ふるものは彌陀の利劍を凌ぐに足る鋭利な文筆の劍がある。之を縦横無盡に薙ぎ廻して驀然と突進したのだから素より野郎記者のやうに魔性の者共から頭を齧めずり廻はさるゝ心配もなく、喰はれたり木乃伊になつたりする心配もない。近づけるところまで近

序

づいて、充分に究むべきところを究め、目出度魔性の者共を生捕にして凱旋するを得たのである。是れ即ち虎穴に入つて虎子を生捕にしたものである。

なてし子さんが目出度生捕にして虎穴から持ち還つた虎の子が、即ち斯の一書である。祝へく諸共に、買へく斯の一書を。お目度たうなてし子さん〇〇新聞美人記者なてし子さん萬歳、ばーんさい!!

大正四年七月

姪知
青柳有美談

目次

語物なとや

- (一) 女だてらの人生探訪……………(一三)
美人寫眞入の引札——大正の御代の新産物——廣くて深い新生活——さても不思議な女——「やとな」の怪氣焔——元宮内大臣の奥線——謎に蔽はれた秘密——四疊半の差向ひ——忍び難い屈辱
- (二) 『やとな』のお目見得……………(七)
化け込みの第一日——時代おくれの綺お召——顔を見られるやうな氣持——カフェー、ヤトナ——薄暗い部屋——「やとな」を偽さるお積り？——京都生れの女將——こんふのが屹度色魔
- (三) 樂で金の儲かる秘訣……………(二三)
電話で取次——「やとな」の營業案内——夜のお座敷は？——娯楽姿の花ちゃん——藝と顔

と着物——一度出れば五圓——不思議な手つき

(四) 花ちやんの懐中鏡……………(二八)

つまらない平座敷——収入は稼ぎ高の七割——新米ですから宜しく——お座敷は一人が靄氣
——お店は營業停止——お座敷の電話——須田町の萬世軒

(五) 松井須磨子に似た女……………(三四)

「やとな」名簿——横町から細い露路——まあ好かつた——化け込みの二日目——廿二三の束
裝姿——綺麗なお歯と黒い瞳——△橋の八九六番

(六) 鼻下長の「先生」……………(三九)

お約束のが只今——待たれる男——ゆうべの酒の名残——よつばらつた刺繍姿——火鉢を囲
んで眠めくら——下を向いて「くすり」

(七) 振られ「やとな」……………(三四)

廿日のお灸——鼻下長は辯護士——大變な事務所——富世良人氣質——店の間の長相談——

——四五枚の電車切符——須磨ちやんの落第

(八) 思ひがけない白羽の矢……………(四二)

亭主持で待合行——奥さんの顔色——不良少女の標本——ゆうべのお客の品さだめ——急に
あんたを——絶體絶命——苦しい逃げ口上

(九) 男たらしの奥の手……………(四六)

目の利かぬ女將——かぶりを横に振るとは？——秘法の傳授——それから先は腕次第——
まあお嬢さんだわねえ——待兼ねて催促の電話——やつぱり駄目

(一〇) いやな男を待つ辛さ……………(五〇)

うぶだから駄目——否應なしに電話口——引込み思案は禁物——散歩のお供——女將の策戦
——片隅へ退却——わたしが奢るわ

(一一) 法廷に立つ勇將……………(五六)

ハイカラの洋服姿——玉川畔の現泉亭——二本のビール——つりなんか入らないよ——四十二

年の大學出——大森にゐる管の人

(一一二) 肌身離さぬ紙袋……………(六三)

天下一品の番頭——寶袋の謎——桃色の預金帳——花ちゃん一才——内證話の聞き耳——店の舞臺の秘密劇——つまらなさうな顔——けちなお客

(一一三) 更けて艶めく春の夜……………(六八)

看護婦あがりの女——情けない交渉——身に沁む夜寒——一同を事務所へ——愚圖々々すれは大變——あとは野となれ——四晩續きのお座敷——街の柳に見送る影

(一一四) 心ときめく初座敷……………(七三)

連雀町の高等旅館——大丈夫は請合——自働電話——黒幕のTさん——存外の親切者——金三圓也の請取——菊山さん——門に待つ母衣俵

(一一五) 芋堀男の丹前姿……………(七九)

大膽の氣おくれ——式臺の出迎へ——黄色のスリツパ——不安な四疊半——三毛猫の田舎作

紳士——イヨオ入らつしやい——主筆殿の悪い評判——代議士の卵?

(一一六) 後藤新平さんに似た男……………(八四)

知らぬが佛——仙臺の素封家——素敵な好男子——ふとした好奇心——不器用なお酌——國への土産話——「やとな」に恐縮するお客——和睦の印——つらい盃

(一一七) 飛んだ所て同業者……………(九〇)

怕ろしい不安——天機漏すべからずだが——派手な職業——美術家? 文士?——京橋の大きな新聞社——胸を冷やしたお客様——案外のおめでたき加減

(一一八) ノートは私の懐中にも……………(九六)

迂闊な記者先生——女記者と女學校の先生——良妻賢母の御講釋——哀れつばい聲——小説の材料——お相憎さま——帯の中から講取

(一一九) 高麗屋張りの好男子……………(一〇二)

五十錢銀貨を六枚——きゆつと手首を——零の色男——精養軒の支配人——學資を出して黒

幕——それから住所と姓名とを——氣味の悪い人——三十六計

(二〇) 銀貨に注ぐ冷い眼と眼……………(二〇八)

お可哀相な菊山さん——お料金は戴いて来て?——大威靈の當はづれ——變な笑ひ——飛んだお尻ぬぐひ——小切手は眞つ平——芝居のお供

(二一) 分け前髪の薄化粧……………(二四)

木挽町の乙女俱樂部——作り聲の出鱈目——「やとな」に露路は附き物——大変見の部屋——黒獸上の男帯——隣室のお客——不思議な女の正體

(二二) 禪學「やとな」の黒猫……………(二九)

錆のある聲——弱い稼業——脱み付ける隣りの部屋——イヨオ下京ッ——聲色まじりの巫山戯——學校で禪學——妙な仇名——畜生ッ警察の犬!

(二三) 乙女俱樂部の女主人……………(三五)

小意氣な女——遊藝人の醜札——藝者屋の嫉視——野暮な素人臭い私——女將の信任——此

家の料金——今夜旦那は?

(二四) 男の聲で呼出し電話……………(三〇)

時にどんなものでげす——寶亭でも奢らせてよ——収入は半分——安く見積つても六七十圓——その邊はお覺悟——お座附は俄か稽古

(二五) 眞夜中に何の騒動……………(三六)

お上さんに知れては大變——短氣らしい五分刻の旦那——不美人辯ひの長火鉢——不思議なお春姉さん——額の兩隅に人差指——いよ〜明日から

(二六) 嘘で固めた身の上話……………(四三)

着換へを包んだ風呂敷包——もと私は京都生れ——母と二人で小料理屋——見學のための「やとな」——苛められた十七の花嫁

(二七) 藝者を相手に競争……………(四七)

堅氣で孫すのは歌——藝者よりお手輕——仲間が多ければ心丈夫——波瀾深慮——お花ゐる

か——深切な人——綾ちゃんの義太夫

(二八) 廊下で半分の八百長……………(一五三)

黒猫はまだ？——赤阪の例の所——せめて二三本——氣のきかないお客——御婚禮や法事の席——華族のお座敷——俵夫うは前

(二九) 大根河岸のおてん屋……………(一五八)

向島のお座敷へ行つた晩——入形町の洋食屋——小意氣な家——やつと赤電車——姉さんの千里眼——彌造をきめ込んだ女客

(三〇) 女だてらのコツプ酒……………(一六三)

お腹の皮——酒落者の女房——コツプで三四杯——好い度胸——八の字眉を愈よ八の字——賄賂のネーブル誰の惚氣——たんとお徳き

(三一) 隅田の畔の四疊半……………(一六九)

黒猫のお歸り——向島の小松——最急行の乗り上げ——不別續の阿婆ずれ——女將のすつば

ぬき——もう隠したつて駄目——姉御の吃驚

(三三) 土手の暗闇が險呑！險呑！！……………(一七三)

おひろめの手拭——同朋町の二葉——厭になる呑ん平——大井に山ほどの菜漬——表はお召裏は金巾——セメント樽ほどの罫——往きには財布の口が肝腎

(三三) 春の夜寒の假り枕……………(一七九)

雨だれの續き——兄いさんの一聲——お樂み筋——ほろ酔機嫌の馳かしさ——當分は浮氣どめ——旦那のお出——花吹き散らす夜半の嵐

(三四) 亂痴氣最中に泥酔女……………(一八六)

疥癩玉の遣り場——すはや女將の誓——私が是れから談判に——血相變へた二人の女——旦那は慌て、跣足の儘——橋の上で小間物屋——口説の果

(三五) 前借と電車賃……………(一九三)

嵐の翌朝——ちよつと實家まで——上野の「やとな」俱樂部——戀の深さうな横柄面——誰か

旦那は無いのか——藝者の鑑札

(三六) 月収二百圓の「やとな」……………(一九七)

浮氣稼業の女の自由——ぼろい商賣——やとな屋の本来本元——こないだの替八風——お座敷着までお倉の中——炬燵を中の差向ひ——そなたに足で突ついちゃ

(三七) 「やとな」仲間の棚卸……………(二〇三)

小意地の悪る相な女將——芳町の大正藝者——中々の莫逆者——夢二式の美人——迂散な目つき——一寸覗いたカフェー、ヤトナ又もや記者殿

(三八) 露と厭ふは昔氣質……………(二〇八)

新聞の廣告係——不審さうな類——支那人のお客——鴉鴉の出来損ひ——袖を引張つて物蔭まで——竹からなら八圓——すぐ騒ぐ大和撫子

(三九) 押の強い支那人氣質……………(二一三)

異人は濃厚——きまつた旦那——油虫に附かれた秀ちゃん——油虫とは何ぞや——遊澤男の三千羽の養鷄——背負糞姿——蚯蚓の聲と瞑想——女學生から玉子賣——千住の底ぬけ騒

お座敷——痺れのきれるまで——肩へ掛けられた手

(四〇) 黒猫の兄いさんの屈托……………(二二八)

池の端の東仙閣——後門の狼——徳利と睨めくら——大根河岸行——山崎長之柿の姿——岡惚れでもしよかしら——滿更の心持

(四一) 柳の蔭に消える二人……………(二三四)

化込み女の第二號——電話屋の内職——私の好い人——黒猫は氣取屋——地方へ行つて新聞記者——下駄の音をからり——寝物語

外やとな傳 **黒猫物語** 目次

- (一) 男づくりの謎の半生……………(三七)
- 原書のバイブル——解かれぬ黒猫上の帯——油を管めたくも電燈では——更けて勉強の豆ランプ——總武鐵道の出札係
- (二) クロボトキンの崇拜者……………(三四)
- もう一息で女判任官——幸徳秋水と菅野すが子——精養軒の會計係——鈴が森の身投げ美人——米相場で大當り
- (三) 人助けの八十圓……………(三四六)
- 青くなつた西洋婦人——肌着のかくしからお札——上海の消印——男知らずの廿五才——同性の戀——田園生活
- (四) 蛙の歌とマンドリン……………(三五)

- (五) 太陽閣の夫婦風呂……………(三五五)
- 熱心なクリスチャン——吉原の奇遇——英學塾出身の花魁——四五十組の奇怪な客——きどい藝當
- (六) 忍ぶ戀路の母衣傳……………(三六一)
- 淪落の淵——假面の世の中——令夫人と新俳優——人生のユウモア——角帽と扇髪——仲部屋のお時さん
- (七) 短刀を突き附けての戀……………(三六五)
- 筒袖の寝巻姿——自轉車の稽古——男股引で遠乗り——自轉車お時——隅田川へどぶん——不気味なお客
- (八) 淪落の女の行末……………(三七〇)
- 短刀に驚かぬ度胸——電話をチリンと云はせれば美しい妓が——白鞘の短刀——商議から血が——太陽閣の疑獄事件——仲見世の人形屋——呼上娘——半蔵門の産婆學校

やとな物語

なでし子著

〔一〕 女だてらの人生探訪

美人寫眞入の引札——大正の御代の新産物——廣くて深い新生活——さても不思議な
 女——「やとな」の怪氣焰——元宮内大臣の奥様——謎に蔽はれた秘密——四疊半の差
 向ひ——忍び難い屈辱——

『歌舞音曲、禮式の心得ある三都の美人を、園遊會、御祝宴、家庭の御
 宴席、さては四季折々の御遊山のお供などに、年頃、髪形は、お好みに
 任せ、お召しに應じて、即刻に花のやうに装はせて、伺はせ申します』
 文句はさつと右の通り、あるひは幾つかの美人の寫眞などを刷り込んだ

新聞の廣告や、氣の利いた引き札などが、近ごろ大分世間の人目を引くやうになりました。これぞ即ち大正の御代の新しい産物ともいふべき、雇仲居といふ一種の階級の女のことであります。

一體、雇仲居とはどんな女で、何を商賣でせうか？、仲居と言つてしまへばそれまでなれど、只だの仲居とは大分譯が違ふ。彼れは在來の型に嵌まつた女であるが、これは新時代の新しい女です。彼れの職業の範圍は極めて狭く限られてあるが、この職業範圍は極めて廣いのです。彼れの生活は殆んど淺薄であるが、この生活は極めて深いのです。さても不思議な女です！

近頃、さる通人が、東京で稍や古く雇仲居をしてゐる或る女を招んだ時

「一たい君たちを呼ぶお客様は、どのやうな人が多いかね？」
と尋ねたさうです。

すると、その雇仲居は口を開いて、

「さうね、一口に言へば、まあ、藝者にも飽きたし、女優もぞつとしな
いと言つたやうなおお客様が多いわ、かう言ふと、やとな風情が生意氣なと
仰しやるか知りませんが、やとなつて何も高等内侍の上がりや、不見轉の
成れの果てと限つちやゐませんからね。こんど柳橋の寫眞屋さんへお興入
れをした、例の元の宮内大臣の奥さんの小林孝子さんといふ方ね、あの方
だつて、ある土地で、ある家から雇仲居に出てゐて、而かも特等の三圓の
料理屋さんへ行つたことを、わたしはちやんと知つてゐるわ。それから、

名はちよつと明かされないけれど、〇〇大学の英文科とかを卒業して、横文字の本でも新聞でも、すらく／＼読める人が、現在ある家からやとなに出てゐるから不思議でせう、だからさ、やとなだつて、あんまり馬鹿にして貰ひたくないんですよ！』

と、氣焔を吐いたのです。

私は雇仲居に對して、再び斯う叫びます。——さても不思議な女ですと！。

此の不忍議な一種の女に、私は久しく觀察の目を放つてゐました。そして折があつたらば、その實生活を探つて、どんな状態にあるのかを知りたいと思つて居ました。

ところが、日頃思つてゐた私の願ひの達せられる時が、遂に來ました。つまり私は、婦人記者といふ者の立ち場から、やとなの内幕を探るために自づから雇仲居の仲間に身を投じて、その赤裸々な生活、謎に蔽はれた秘密を掴むことが出來たのです。女だてらにと、お蔑み下すつては困ります。その機會は、何れも僅かの間ではありましたが、その間には珍無類な滑稽や、さては又戰慄すべき事實に逢着して、驚きもし呆れもした事が、幾度あつたか知れません。曰く〇〇辯護士の戀、曰く△△旅館の奥座敷、曰く支那人の妾探し、曰く黒猫と名告る教育ある一婦人の奇抜な身の上話、曰く電話屋の女將の化け込み、赤電車を待つ細暖簾、曰く何、曰く何、數へ來れば限りがないのです。

併しこれ等の事實を探らんがためには、假初めにも一種の女の連れに交じつて、酒宴の席の客相手、心にもない世辭愛嬌も詩かなければなりませんでした。どうせ、そんな事くらゐは覺悟の前、格別辛くはなかつたが、これはまた、奥まつた四疊半、客は一人さりの差向ひ、無理に盃を突きつけられて、今更斥ける譯にも行かず、あののきながらも唇にせねばならなかつた事や、更にそれ以上の忍び難い屈辱をも加へられました。

それやこれやの経緯が、やとなの生活に組んで絡んで、この「やとな物語」が成りました。野暮な成りはひの婦人記者、筆には修飾もない代りには、些の誇張もないことを、豫めお断りして置きます。

〔二〕「やとな」のお目見得

化け込みの第一日！ 時代おくれの綺お石——顔を見られるやうな氣持——カフェー・ヤトナ——薄暗い部屋——「やとな」を爲さるお積り？——京都生れの女將——こんふのが蛇度色魔——

化込の第一日は、神田錦町のカフェー・ヤトナへいよく御目見得にと出掛けたのは、節分過ぎの或る日の午後であつた。雇仲居になり下らうと云ふのに、餘り氣取つた服装をして行つては却つて先方に怪しまれようし左様かと云つて、酷くみすぼらしい風をして行つたのでは、落第の恐れがあると思つたので、先づ着物は十幾年か前、まだ國に居る頃、大阪の博覽

會見物に行く時拵へた、時代後れの縞お召に、羽織は是も染直しの稍々疲
 勞れた無地お召、帯はわざ／＼母の質素なのを拜借に及んで、髪は根の低
 い束髪に、後の減つた小町下駄といふ扮装で、神田錦町一丁目中央大學前
 と聞いたカフェー・ヤトナを訪れた。

「本局四九三九番」の白い電話番號札と並べて、丸い瓦斯燈を掲げ、「カフ
 エー・ヤトナ」と看板を掛けた、新しいペンキ塗の二階家の門口に立つた時
 は、往來の人が皆な自分の顔を見るやうな氣がしたので、急いで扉を押し
 て内へ駆け込んだ。

店の室は、丸い卓子が幾個も並んで居る許りて、人氣も無くガランとし
 て居る。入口に近い壁には、カフェー・ヤトナさんへ、みつ枝、よし子、

ひて子、たか、はな子などと書いた惡どい色彩のびらが、幾枚も張られて
 ある。廳で奥の方から出て來たのは餘り美人でない若い女で、私を見ると
 有繫に直それと感取つて、

「貴女雇仲居のことで入らしつたのでしやう」と聞いた。

「え、女將さんはお宅でせうか」と尋ねると、

「入らつしやいますよ。まあ此方へお這入んなさう」

と奥の方へ案内して呉れた。その室は、お湯屋のやうに、天井に明り取
 りのしてある薄暗い室で、隅の方に鏡臺や、机や、錢箱、三味線、戸棚等
 がごちやく／＼と置かれ、眞中に長火鉢が据ゑられて、その傍の壁に、電話

器が取り付けてあつた。長火鉢の傍には、外套を着た三十格好の餘り風采の宜くない男が一人、火鉢の椽に頬杖突いて坐つて居た。

女将さんは、恰度出先から歸つた處と見えて、他所着の上に、其所にあつた紺緋の筒袖を引かけて、長火鉢の前に坐りながら、

「貴女、此方へお上んなさいな。」

と長煙管で、火鉢の傍の座蒲團を私にも進めて呉れて、

「何ですか、雇仲居を爲さるお積り？ お所は何所です。」

などと問ひ始めた。

私は東京の生れなんですけれどお父さまが亡くなつたので、お母さまは今京都に居ります。私も昨年の暮から京都に行つて居たのですけど、つい

此間一人で此方へ歸つて來ましたの。日本橋の方の親類に世話になつて居るのですが種々家の都合もありますから、少しこちらの御厄介になつて見ようかと思つて、實は出ましたの。」

と眞實しやかに云ひ拵へて答へると、

「まあ左様、そんなら貴女も京都はくはしいのね。私も國は京都なのよ。」

と女将は急に打ち解けて東京と上方と混同の言葉で話し始めた。

京都の木屋町でつい近頃雇仲居を始めた家があるさうだつてね。貴方知つててか。そして貴女雇仲居にちつとは出た事があるの。」

「否え、初めてですの。私のやうな者でも、出來ますてせうか。」

と私は初心らしい態を作つて問ひ返すと、

「何アに、そんなに六づ加しいことは無いよ。新聞なんかには、歌舞音曲なんて廣告して置くけど、藝は別に大しては不要いのよ。三味線はお座附き位でも弾ければ澤山。藝なんか皆宜い加減な者ばかりだわ、ねえ〇〇さん。」

と頰杖の外套の男の方を向いて云つた。

「左様だよ君、そんなに心配しなくても宜いよ。僕も以前八官町に雇仲居會社がある時分は、株主の一人だつたからね、雇仲居のことは能く知つて居るが、藝なんか皆ほんの看板だけさ、まあそんなことに氣遅れしないて大に遣り給へ、君。」

と外套の男は相鍵打つやうに云ふて、にやりと厭な笑ひ方をした。此の

男、風采に似合ない大法螺吹き。恁麼のが屹度色魔といふのかも知れないと私はじろくとその男の顔を見て遣つた。

(三) 樂で金の儲かる秘訣

電話で取次——「やとな」の營業案内——夜のお座敷は？——婀娜姿の花ちゃん——藝と顔と着物——一度出れば五圓——不思議な手つき——

怯々して居る記者の態度を尻目に掛けて、女將さんは煙草の烟を輪に吹きながら、

「家ではね、住込みではなしに皆通ひだから、正午前から晩の十時まで此方に來てて貰へば結構だし、さうてなかつたら、電話の取次ぎが利きさへ

すれば、御座敷が掛つて来た時、直ぐに電話で聘らせて上げるやうにしても可いの。近い處だと使を走らせることが出来るから便利だけどね。」
 などと話して居る處へ、此家の亭主が、何處からか車で歸つて来た。色の黒い、口の大きい、五十がらみのてつぷりした此の家の亭主は、毛皮の襟の附いた長いマントを着た儘で、横柄に火鉢の傍に安座を組いて、先刻から待つて居た外套と、何やら小聲で相談を初めたが、聽て二人伴れて、又あたふたと出掛けて行つた。

外套の男が居なくなると、女將は立つて、机の抽出しから雇仲居の營業案内を一枚出して来て、

『是に仔細しいことが書いてあるから御覽。それから貴女ね。』

と急に聲を低めて、

『先刻は、あの男が居たから、私わざと聞かなかつたけれど、貴女夜のお座敷は出られる？。如何？。』

私は思はず胸を悸然とさせて、眼を見張らずには居られなかつた。折から其所へ裏口の木戸をごとりと開けて、雇仲居らしい一人の美人が這入つて来た。

その美人は、廿歳前後の眼許の艶な、一寸仇つばい女で、白粉をこつてりと塗つて、縞お召の着物に、派手な色の縮緬の羽織を襲ね、黒縹子の帯の間から紅い帯上げを覗かせながら、

『奥さん今日は。』

と何處までも婀娜しい風姿で上つて来た。

「花ちゃんかい。什うしたの昨夜は？」

「あのね、餘り遅くなつたから、寄らないでずつと歸つたの。奥さん一寸電話を拜借。」

と直に電話器の前に立つて、何處かへ電話を掛けはじめた。

奥さんと呼ばれて納まつて居る女將さんは、又一吸煙草を吸ひ付けて、今度は記者に、

「案内書には等級が特等、一等、二等としてあるてせう。それは藝や顔、着物なんかの違ひで區別してあるんだけど、先あ第一は顔で、その次が衣裳、着物は普通、この頃ではお召の襲ねに丸帯といふのが定めなんだが、二等

の御座敷なんかなら、銘仙でも出られないことはないわ。藝は先刻も話したやうに、ほんの看板だけだから何うでも宜いの、そして料金は、二圓五十錢の、二圓の、一圓五十錢となつて、時間は、晝は午前から午後の五時まで、夜は六時から十一時まで。夜の料金は、晝間の五十錢増といふことにしてあるけれど、打ち明けていふと、それに書いてあるのは、平座敷だけの料金でね、待合の御座敷に向く人なら、もつとお錢が取れるの。待合の御座敷とあると、一度出ればいくら少くても五圓にはなるからね。そしてその方なら、第一骨が折れないし、氣は樂だし、それに時間だつて却て短くて歸れるしさ。何うせ貴女恠う云ふ職業をしようといふ以上は、さう堅いこと許り云つてたつて仕方がないから、貴女なんか、此方が承知なら

そりや随分収入があるわ。』

と女將は、首を少し右に傾けて、不思議な手附きをして見せた。

〔四〕花ちゃんの懐中鏡

つまらない平座敷——収入は稼ぎ高の七割——新米ですから宜しく——お座敷は一人が暢氣——お店は營業停止——お座敷の電話——須田町の萬世軒——

美しい花ちゃんは、未だ電話に掛つて何事か密々話して居る。女將さんは、一寸その方へ横目をそらして、

あの妓だつて家へ来るやうになつて、未だ間がないんだけど、一寸顔が美しいもんだから、平のお座敷は骨が折れるばかりで詰らないからつて、

此頃ちやこの方専門に出てゐるの。』

と又招き猫の反對のやうな手附きをして見せる。その中に花ちゃんが電話をすまして、火鉢の傍へ来て坐つたので、女將は話を外らして、

『それからね、歩合は凡て料金の三割を自家で貰ふことにしてゐるの、然し料理屋や待合のお座敷は、その家へ一割置いて來るのがきまりだから、その時は双方で五分づゝ出し合つて、結局二割五分此方へ貰へば宜いわけよ。その他の祝儀とか、種々な貰ひ物は皆其方で丸取りにして宜いのだから、平座敷だつて、一日に二座敷も稼げば、女の仕事としては随分収入の宜い職業よ。』

説明が済むと女將は、大きな欠伸を一つして、柱の時計を見上げ、

「あやもう五時だ。」
立上つて、流し許の方へ下りて行つたあとは、花ちゃんと私と差向ひになつた。

「新米ですから宜しく。」

と私が頭を下げると、

「あら、私も新米なんてすわ、何卒宜ろしく。」

と、花ちゃんは、お俠な言ひやうをして、懐中たら緋鹿子の煙草入れを取り出し、細い煙管で一服吸ひ始めた。

女将さんが流し許でお米を研いて居る間に、私は小聲で花ちゃんに種々なことを聞いた。

「お忙しくつて?。」

「有難う、お蔭様で。」

「何時頃から此家へ入つしやるの?。」

「二月ばかり前からよ。」

「ちや、もう随分お座敷へもお出でになつたてせう。」

「でも私怠惰で許り居たから駄目よ。」

此家の皆さんと一座したお座敷は、未だ一度つきりないの。だけどお座敷は一人て出た方が反て樂ね。仲間と一所だと随分氣骨が折れるわ。」

花ちゃんは一寸眉を寄せて、

「それにお店がないと暇ね。」

「此家ではお店でカフェーもしてらしたの?。」

「え、先月の末まで遣つてただけど、此間営業停止とかを喰つたの。ほんとにお店がある方がずつと宜いわよ。さうすれば私達も斯うして居る時間に、お店へ出て居られるでせう。お馴染のお客なんか来れば、御祝儀を呉れたり、お座敷を付けて下さつたりするしね。一頻はそれ面白い程繁昌かつたのよ。」

恁麼事を話して居ると、チリンチリンと電話のベルが鳴つた。花ちゃんが出ようとすると、女将さんが流し許から急いで上つて来て、電話口へ出た。聽て、

「畏まりました。仕うも有難う。」

と電話を切ると、花ちゃんに、

「あのね須田町の傍の萬世軒といふ料理屋からお座敷よ。お客は二人だつて、二等で宜いつて云ふんだが、お前さん行くかい。」

「二等?。」

花ちゃんは餘り氣乗りのしないやうな顔をする。

「貴女行かなきゃ、誰か聘びに遣るが、行つたら如何?。左様して遊んで居るより好いぢやないか?。」

「さうね、ぢや私行くわ。」

花ちゃんは急に煙草入れを袂へ仕舞つて、帯の間から懷中鏡を取り出して、顔を直し始めた。

「もう一人招んで呉れば、貴女も一所に行かれるのにねえ。その中又一所にお座敷へ出ませうね。」
私に愛想を云ひく被布を着て、
ては行つて参ります。」
と出掛けて行つた。

〔五〕 松井須磨子に似た女

〔やとた〕名簿——横町から細い露路——まあ好かつた——化け込みの二日目——廿二三の
東髪姿——綺麗な齒並と黒い瞳——△橋の八九六番——
花ちゃんを入れ違ひに、前刻出て行つた亭主が歸つて来た。外套を脱い

て火鉢の前へドツカと胡座を組いて、
「オイ、早く御飯にしないか。」
と催促を初めたから、私も一先づ引上げて歸らうと思つて、
「では私、又明日参上ることにしますわ、奥さん。」
と、お冠を曲げてはならぬと思つたので、今度は私もお女将さんに、
奥様の尊稱を用ゐてやつた。
「左様、そんなら明日は來られたら早くから出掛けてお出で。あ、それから貴女の住所と名前を控へて置かなくちや。」
と手を拭きく女将さんが上つて來ると、
「よし俺が書いて遣らう。何處だお前の住所は。」

「亭主は初めて私に横柄面わらべづらで尋ねた。そして雇仲居名簿やとまどろと書いた帳面ちやうめんに、私の名告る住所と姓を書き附けたが、名前は「つや」といふ名が宜いと、女将さんが選んで附けて呉れたので、私は遂々「つや」ちやんと名告る雇仲居と成る事になつた。

應て暇を告げて、歸る時、今度は私も裏口から出て見ようと、裏木戸を開けて見ると、其所は横町から這入れる細い露路になつて居た。外へ出ると、向ひの家の軒に附いて居る五燭の電燈がぼんやり、釘附にされた牛乳箱を照して、襟元に吹き入る夜風がぞつと身に染みる。溝板の上をがたごとと傳つて、横町に出て、明るい燈の賑やかに並んだ小川町の大通りへ出た時は、もう七時過ぎであつた。

三田行の電車に乗つて、始めて私は「まあ宜かつた。」

と、ほつとした。そして明日からは什麼ことが起るやらと、種々な空想に捉はれながら、家路にと歸り着いた。

再び錦町のカフェー・ヤトナに私の身體を見出したのは、その翌日の午後の四時頃であつた。假初とは云へ、有繋に人の見る眼が後めたいので、前晚勝手を覺へて置いた横町の露地からこつそりと、裏木戸を開けて這入て行くと、女将さんは相變らず長火鉢の前で煙草をスバ／＼と吹かして居て、その傍に廿二三の東髪そくはつの女が來て居た。

「遅かつたのね。」

「え、少し道よりをして居たもんですから。」
斯う云ひながら、上つて火鉢の傍に坐を占めると、直ぐ隣に坐つて居るお仲間らしい束髪をじろく横眼で見つてやつた。服装は錦仙の着物に縞モスリンの質素な羽織、半襟は縫なほしのうす汚れた縮緬といふ、極く粗末な風姿だが、顔は色白の面長で、睫毛の長い二重險の黒い瞳は、一寸好者を牽き附けさう。

「先刻ね、又電話が掛つて来たのよ。」

「まあ然う。ぢや遅かつたでせうか。」

束髪が少し心配さうに聞く。

「何、さうでもないわよ。來次第、此方から電話でお報らせしませすと云つ

て置いたわ。」

「さう、どうも済みません。」

嫣然と綺麗な齒並みを見せる。私は此の女の、私の強さうな閃きのある黒い瞳と、笑ふ折の美しい齒並とは、何處か松井須磨子に似通つて居ると思つた。聽て女将さんは、電話の前に立つて、呼出したのは△橋の八百九十六番であつた。

〔六〕鼻下長の「先生」

お約束のが只今——待たれる男——ゆふべの酒の名残——酔つ拂つた婀娜姿——火鉢を圍んで眺めくら——下を向いて「くすり」

女将の能辯は、滑かに電話口に響く。

「もしく、貴方は〇〇さんの事務所ですか。先生は居らつしやる。では恐れ入りますが、ちよつと電話口へ、……あ、先生ですか、先刻は何うも失禮。あのお約束のが只今参りましたが、何方へ伺はせましやう……左様、では此方へお出かけ下さるんですね。え、？ 日が暮れたらですつて。既う暮れか、つて居るぢやありませんか。まあ、あんなことを。餘り待たせると泣き出しますよ。では、どうぞお早く。お待ちして居ります。左様なら。」

女將は笑ひながら電話を切つて、

「あのね、此方へ出かけて來るとさ。」

「何うもお世話様。」

東髪は一寸會釋する。

「如何な男が來るのだらう？」と私は好奇心を唆られた。

そこへ裏口から、昨日の花ちゃんが這入つて來た。花ちゃんは今日は髪を銀杏返しに、襟白粉を思ひ切り白く塗つて、昨日よりも一層婀娜めいて見えた。

「花ちゃん、昨夜は随分酔拂つて歸つたのね。」

「左様ですつてね、奥さん、私些つとも覺えて居ないわ。だつて、二人のお客にすつかり飲まされちやつたのですもの。」

と、甘つたれるやうに言ふ。

「何しろ昨晩は、花ちゃんの一人舞臺だつたわよ。」

お女將さんは花ちゃん顔見合はせて笑ひながら、
 「あのね、昨夜花ちゃんは宵の中に須田町の傍の料理屋さんへお座敷に行つてね、十時過ぎに酔拂つて歸つて来たの。其處へお客が来て、酔つて居るからと云ふのに、その酔拂つた様子が善いからつて、遂々無理にそのお客に連れられて行たのよ。」

と、束髪に話した。束髪は饒舌でないと見えて、何を言つても餘り多くを語らぬ。その中に女將は、二階で晝寝をして居た子供が、眼を覺ましたので、急いで上つて行つた。

三人は火鉢を圍んだ儘、所在なく暫く眺めつくらしをして居ると、表の扉が開いて、下駄の音と共に、焦茶の外套を着て、山高帽を冠つた紳士が這

入つて来た。覗いて見たか、女將の姿が見えないので

「女將さんは如何した。」

と云ひながら、ずん／＼上つて来て、私達の坐つて居る火鉢の傍へ、どつかりと坐り込んだ。

「何した皆、忙しいか。」

花ちゃんも私も束髪も、——私は此の束髪の名を聞き洩した。が、その顔が松井須磨子に似て居るので、假りに須磨ちゃんとして置きませう。——三人顔を見合はせたまゝ黙つて居ると、

「オイ何うしたんだ。黙つて居ないで、誰か返事をしなやか。」

花ちゃんは、下を向いてくすり。私はこれが先刻の八百九十六番の先生

と呼ばれた電話の主だらうと思つたから、俯視いた儘上眼づかいにその顔を盗み見ると、三十四五の色の淺黒い、面長の、鼻下に薄い八字髭を貯へた、眼尻の少々下り加減の、斯う申上げては甚だ相濟まないが、先づ鼻の下の大分に長さうな旦那様である。その内に、二階から女將が下りて来て「まあ先生、入つしやいまし……」

〔七〕 振られ「やとな」

二十日のお灸——鼻下長實は辯護士——大變な事務所——當世良人氣質——店の間の長相談——四五枚の電車切符——須磨ちやんの落第——

二階から下りて來た女將は、件の鼻下長紳士の顔を見ると、

「オヤ、入つしやい。先生、先刻貴郎の處へ電話を掛けた時ね。初めに女の方がお出になつたから、私奥様かと思つて驚きましたわ。」

「あれか、彼れは婆やさ。奥さんなんか事務所に居るものか。」
鼻下長さんは苦笑した。

「時に先生、私此の間随分馬鹿な目に會ひましたのよ。」
と女將は思ひ出したやうに言ひながら、鼻下長さんと差向ひに座る。

「何うした？」

「あのね、家に次前居た料理人の奴が悪黨でしてね。住込て來て居た雇仲居と好い仲になつて、馴れ合て不良い事をしたんですの。だもんだから私が直ぐに兩人へ暇を呉れてやりましたら、その雇仲居が先達て宿屋から夜

明けに出る處を刑事に拘引られてね、出された意趣返しに、警察署で家の有こと無いこと喋舌り立てたもんだから、早速警察から私にも一寸来いさ行くと、その儘拘留てせう。そこで良人が種々心配して見たんですが、何にもならないので、とう／＼私は二十日のお眼玉さ。私、ほんとに落膽しましたよ。全く間が悪かつたのですわ。後から聞けば、早く先生方にお願ひすれば譯はなかつたのですつてね。」

私は先刻から、この鼻下長さんを辯護士と睨んで居たが、此の對話で愈々然うと知つた。(鼻下長さんでは餘りに氣の毒ですから、次後は〇〇辯護士としよう。)

「僕は一寸家へ電話を掛けて置かう。」

〇〇辯護士は、電話の前に立つて、

「〇〇の千九百十三番、オイ／＼、今夜は大森の方の宴會に行くから遅くなるよ。だが、今から一寸歸るから、洋服を出して置いて呉れ。胴衣は海老茶の方だぞ。」

電話口へ出たのは、奥様と見へて、辯護士は此方に向いて、ペロリと赤い舌を出しながら、

「何、今ゐる所は何處だつて？。此處か、此處は△橋の事務所さ、ぢや頼むぞ。」

がらりと電話を切る。

「先生大變な事務所ですわね。」

お女將がぶつと吹き出した。ほんに口は重寶なもの、電話は便利なもの、斯うして眞實な奥様をまんまと欺いて、空聞に泣かす不埒な旦那様が、東京の市内だけでも毎夜幾百人ある事かと、私は當世紳士の裡面を眼の前に見せつけられて、仇も怨みも無いんだが、〇〇辯護士の後姿を睨みつけて遣つた。

應て女將は辯護士と一所に店の方へ出て行つた。一體此所の家は妙な具合に出来て居て、假に、店の間を舞臺とすると、只だ一つの奥の間は舞臺裏の樂屋と云つた形で、樂屋の室に坐つて居ては、舞臺の店で何を相談して居ても見ることも聞くことも出来ない。女將と〇〇辯護士とは店の室で何の相談か随分長く話し合つて居たが、ものゝ三四十分も経て、漸く女將

さんだけが這入つて来て、上り口から

「須磨ちゃん一寸。」

と束髪を呼んだ。

私は見ない振して、横眼で睨んで聞き耳を立てて居ると、女將は須磨ちゃんに電車の回数券を四五枚握らせて、

「あのね、貴女此の切符で兩國の橋の傍に公園があるだらう、彼處まで一足先に行つて、何處かあの近所待つて居て貰ひたいつて。一所に出かけると眼立つと仰しやるから。それからネ。」

と、未だ何か言はうとして居ると、辯護士さんが店から

「女將、々々。」

と呼んだので、女將は又出て行つたが、今度は五分も立たないで這入つて来て、

「あのね須磨ちゃん、氣の毒だけど、旦那は今事務所から使が来て、ね、急に御用が出来たんだとさ。早く済んだら又出掛けて来るとおつしやるから、貴女一先づ家へ歸つて居ても可いわ。入らつしやるやうなら、電話で前に報らせて下さるさうだから。」

何か狐に摘まれたやうな女將の話に、須磨ちゃんは怪訝な顔をして居たが、

「然う、ては又出直ませう。」
とそこへ歸つて行つた。

〔八〕 思ひ懸けない白羽の矢

亭主持て待合せ——奥さんの顔色——不良少女の標本——ゆうべのお客の品さだめ——急にあんたを——絶對絶命——苦しい逃げ口上——

須磨ちゃんが歸つて了ふと、花ちゃんは私に、

「ちよいと、彼の方は愛宕下の方から来るのよ、親指があるんですつて。それなのに、待合のお座敷へばかり出るのよ。よく旦那が黙つて出すわねえ。」

自分のことは棚へ上げてと、私は可笑しくなつたが、態とそしらぬ顔で話が出たを幸に、待合のお座敷に就いて種々と聞いた。

花ちゃんは、遠慮もなくべらくと話し初めた。

「私だつて、待合のお座敷へ出るのは此の頃からの事よ。初めて出た時は随分心配だつたわ。でもね、馴れると左様でもないことよ。それに平座敷より特等だつて三圓限りてせう。それがあの方のお座敷だと、料金外に四圓から五圓は貰へるんですもの。歸つて来てお錢を出す折、奥さんの顔色が違ふわよ。でも、私始めて家へ歸つても母さんに話した時は、お母さんに随分叱られたわ。」

話し振りて見ると、花ちゃんはどうかやら嗜き好んで此の境涯へ飛び込んだらしく、所謂現代の不良少女とは、此の女のやうなものではあるまいかと思はれた。

良家に育つた妙齡の子女ならば、假初に他に云はれてさへ顔を赧めねばならぬやうなことを、平氣で自ら口にして、然も恬として耻とも何とも感じて居ない此の社會の人の厚顔しさには、私も今更の如く呆れて、ほんのりと上氣した花ちゃんの艶な横顔を、しげく見成らずには居られなかつた。そこへ、餘り服装の宜くない年増の雇仲居か二人、裏口から又這入つて来た。火鉢の周圍は、急に賑やかになつて、皆なは昨夜のお客の品評、お仲間の蔭口、はては公然と書くを憚るやうなことまで平氣で喋り出した。年増の一人が高ちやんで、一人がお秋さん。高ちやんは田舎藝者の果らしく、お秋さんは上方者で、雇仲居の古狸と私は睨んだ。

應て勝手許から、前掛て手を拭きく出て来た女將さんは、上り框から

顔を覗いて、

「ちよいと艶ちゃん、貴女に少し話があるから、顔を貸して。」

と呼ばれて、つい迂濶して居た私は、艶ちゃんが自分の名であつた事に気が附くと、急いで座を立つて、其方へ行つた。女将さんは耳の傍に口を寄せて、

「あのね、先刻のお客が須磨ちゃんを連れて行く積で来たんだけど、此處へ来てから急に貴女が連れて行きたいと云ひ出したのよ。貴女行つて呉れるだらうね。實は先刻直ぐに連れて行かうと云つて肯かなかつたけれど、でもそれでは彼の女に餘り體裁の悪ひ思ひをさせるから、兎も角も貴方は一度お家へ歸つて入らつしやい。直ぐ後から電話を掛けることにしますか

らつて、私一先づ歸して置いたの。だから早速に返事をしなくつちやならないんだが、貴女行くてしやうね。」

念を押すやうに云はれて、私は驚いて眼を睜りました。豫て此處へ化込むに就いては、私の胸にも、あゝ言はれたら怎う、斯う訊かれたらあゝと策戦計畫は十分立つてあつたものの、さて是れは又思ひもかけぬ飛んだ白羽の矢、私はすつかり面喰つて、何と返事のしやうもなく、只だおどろくするばかりであつた、漸くに、

「でも、奥さん、私未だ馴れない人ですもの。それに私は恁麼風ですから皆さんと御一所の晝間のお座敷の方が結構ですわ。私にはまだ一人のお座敷なんか到底も駄目ですよ。」

と眼を白黒させながら、随分苦しい逃げ口上を並べた。

〔九〕 男たらしの奥の手

目の利かぬ女將——かぶりを横に振るとは？——秘法の傳授——それから先は腕次第——
まあお嬢さんだわれえ——待兼ねて催促の電話——やつぱり駄目——

此方が开様苦しい思ひをして、困つて居るとは夢にも御存じない女將は
「何に、馴れないつたつて、貴女大丈夫よ、花ちゃんなんか初めからそれ
て出たんだもの。」

「ぢや私の代りに花ちゃんをお遣りになつたら——？」

「だつて、貴女に是非といふのに、花ちゃんぢや具合が悪いぢやないの。」

女將さんは解りの悪い女だと言はない許りに眉を擡めて、
「何うせ貴女も此の職業をする積りなら、そんな堅いことばかり言つて居
ては損よ。」

女將の言ふのは無理もない。全く私が新聞記者の化込みなどは、お氣
が附かれないのだから、〇〇辯護士のお座敷に尻込みする私を、大方職業
馴れぬ初心だからだらうと見て取つたと見えて、辯護士さんで、本宅もあ
れば、事務所もあつて、電話の二つも持つて居るといふ旦那に、首を横に
振るといふものがあるものかといつたやうな顔附きて、熱心に説き勧めた
「何もね、一人でも座敷へ出たからつて、必ず直ぐに其方を聞かなくちや
ならないつて言ふことはないのよ。自分で厭だと思へば、私は雇仲居です

から其方は困ります、位言つて逃げればそれで済むわ。その上向うから何處までも左様いふことを言つたら、何うせ浮氣稼業なもの、てはもう少しお馴染になつてからで無ちやと、二三度も聘んで貰つてさ、それから先は貴女の考へと腕次第よ。先方が何處までも熱心と見たら、それこそ此方でお高くとまつて。うんと吹きかけて遣るがいぢやないの。」

男蕩しの奥の手を、後で幾何かの分け前に預かる目的でもあるか、女將は別に傳授料も取らずに私に授けて呉れた。そして、

「あんた一人で行くのが厭なら、誰かに送らせて上げてても可いわ。」と選引ささし得ないやうに説き附けた。

「でも、奥さん、その女に途中で捲かれたら、私厭ですもの。」

と私は何處までも逃げ口上を並べて居ると、

「奥さん、何うしたんですよ。」

と話が餘り長いので、高ちやんが振り返つて訊づねた。

「なにね、○○さんといふお客が是非此人を、聘びたいつて仰有るんだけれど、この人は馴れないから一人では厭だつて云ふのだから、妾、途中で誰かに送らせて上げるからと云つて居る處なのよ。」

「まあ、お嬢さんだわねえ。」

高ちやんはお秋さんと顔見合せて、呆れたと云つたやうな表情をして見せた。其處へ電話がけたたましい鈴の音を立てた。花ちやんが出て、

「奥さん○○さんからよ。」

吾

と呼ぶ。女将さんは、

「そら御覧、返事が遅いから、向うから掛けて来たわ。」

と云ひながら、電話口へ出た。

「先生ですか、何うもお待ち遠様。矢張り私の推量通り、黙——目。」

と、女将さんは黙と目の間を馬鹿に長く引張る。これを聞かされて居る私の心地!!

〔110〕いやな男を待つ辛さ

うぶだから駄目——否應なしに電話口——引つ込み思案は禁物——散歩のお供——女将の策戦——片隅へ退却——わたしが奢るわ

女将の電話は、だんく面白くなる。

「あのね、彼の人はまだ馴れないから一人では厭ですつて。えい？だつて本人が如何しても厭だつて言ふんですもの。私にだつて何うも仕方ありませんわ。だから先刻私が云つたやうに、二三度他の女と一所に散歩か、御飯でも喰べに連れて行らつしやいよ。それからの事でなくちや到底も駄目初心なんですから。あら、誰が嘘なんか云ふものですか。では、只今本人を出しますから、聞いて御覧なさい。困るわねえ、そんなこと仰有つちや。」

女将は受話器を耳から離して、

「艶ちゃん、貴女に電話口へ出るつて。兎も角、なんとか云つてお呉れよてないと、私が嘘を突いて居るやう思はれてるから。」

私は仕方なしに電話口へ出た。すると〇〇辯護士の聲で、

「オイ、何うしたく。」

「折角の思召ですが、私はまだ馴れませんから……。」

その後は何を言つたのやら、私は覚えて居ないが、餘程脱線して居たと見えて、火鉢の傍の雇仲居連がくすくす笑ひ出した。それから女將が又私と代つて出て、遂く〇〇さんがもう一度此家へ出掛けて来ることに相談が纏つて、電話が切れた、後で女將が私に種々云ふ。傍から雇仲居の高ちやん、秋ちやんまでが應援して、

「貴女、結構ぢやないの。大威張で何處へても連れて行つて載くが可いわ。今に入らつしやるから、左様したら、うんと驕らせてお遣なさいよ。引

込み思案ぢや此の職業はとても出来やしないわ。」

と、口を揃へて言ふ。私は返事の仕様が無いので、只だ黙つて笑ひに紛らせて居たが、心の中は心配で堪らなかつた。今に〇〇辯護士に來られたら、何と云ふて逃げたらいいだらうと、胸をどきどきさせながら思案に耽つて居ると、その間に、女將さんは高ちやんと相談を定めたと見えて、

「あのね艶ちやん、それでは〇〇さんが入らしたら、一所に其邊に散歩にも行つてお出でよ。その代り此人が一所に行つて上るつて云ふから。女將の策戦は却々抜からぬ。二人を散歩に連れさせて、〇〇さんから二人の料金を捲き上げようと云ふのである。」

「大丈夫よ、私は途中で捲いたりなんぞはしないから。」

「高ちゃんは困つたやうにして居る私を見て、笑ひながら言つた。それでも厭ですとは有繋に私も云はれぬ。」

「私ちよつと歸つて着物を着換て来るわ。」

高ちゃんは、散歩のお供をしようと言ふので出て行つた。應て表から遊び疲れて歸つて来た子供達、

「お母さん、御飯、々々。」

と責めたてるので、女將は火鉢の脇に食卓を擴げて、その上に葱と蒟蒻とを山のやうに盛つた平皿と、竹の皮包の牛肉とを戸棚から出して載せ、火鉢に肉鍋をかけて御飯の支度を始めた。

私達は小さな火鉢に火を少し分けて貰つた、片隅の方へと退却を始める

と、花ちゃんが退屈相に大きな欠伸を一つ。

「奥さん、お店が無いと眞個に不自由ね。お腹が空いても、料理人さんにキッチンカッを一つと云ふ譯にも行かないし、ライスカレーを一つ頼むことも出来ないんだもの。」

恸懣事を云いながら、立上つて、襟巻を肩に、

私、一寸行つて来ます。」

と土間の方へ降りて行くので、私も其の後を追うて、

「花ちゃん一所に行きませう。そして私が驕るわ。」

と云ふと、

「あら、貴女はお止しなさいよ。今に〇〇さんが入らつしやると云ふのに

出ちや悪いわ。それに今夜は皆が居るから、その中二人限りの時に私しが
驕るわね。』

と宥めるやうに言つて、獨りて出て往つ了つた。

一一 法廷に立つ勇將

ハイカラの洋服姿——玉川畔の玉泉亭——二本のビール——つりなんか入らないよ——
四十二年の大學出——大森にゐる筈の人——

私は仕方なしに又元の席へ坐ると、そこへづらりと亭主が歸つて來た。

『どうだ、みんな。今日は誰か出たか。』

恐縮して居る雇仲居連を尻目に掛けて、火鉢の前にドツカリ、早速鍋

を突いて、銅壺の熱燗で一杯飲み始めた。暫くたつと、高ちやんが着換を
して歸つて來た。もう一人雇仲居が來る。その中に〇〇辯護士が又とら
く遣つて來た。

『まあ先生遅かつたぢやありませんか。』

『あ、途中で友達に捕まつてね、一所に飯を喰つて居たんだ。』

と靴を脱いで上つて來る。成程今度は洋服姿で、すつかり高襟。但し帽
子は相變らず山高帽。そして右の手に細長い紙の袋を持つて居る。失刻來
た時にも此の紙の袋を持つて居た。私は、此の袋に何が入つて居るのだら
うと、變に思つた。〇〇さんは亭主のやうに座を占めて、

『オイ君、君ん所の玉川の家といふのは什麼處だ。好い處か。』

天

「えい、玉泉亭と云ふて、玉川ぢや先あ第一でせう。」

「先生、是から行つしやるの。」

女將は私に、ちらり横眼をくれて聞く。

「今夜はもう遅いから駄目だ。二三日中に出掛けよう。」

〇〇さんも私の方を向いてにやり。私は何を言はれても知らぬ振をしてやらうと、机の上にあつた新聞を取つて、済ました顔で読み始めた。

「失禮ですか、先生お一つ。」

と亭主が盃を出す。

「あ、僕はこれよりかビールを取つて貰はう。女將、これで買はして呉れ今夜は此家で飲むんだ。」

天

ポケットから一圓紙幣を出して女將に渡すと、

「先生のお使ひなら、私が行つて上げますわ。」と、

秋らやんが立つて、

「先生、ビールはキリンですね。」

と言ひながら、そゝくさと出て行つた。

散歩は何うやら沙汰止みになつたらしいので、やれくと、ほつと一息折角着換へまして來た高ちやんは、的が外れたと云つたやうに、女將と顔を見合はせる。

「先生如何です、近頃は忙はしいですか。先生は選舉の方は御關係はありませんか。」

「大ありさ、明日もその用で前橋まで行つて來なくちやならない。」

へえ、ては御親戚の何誰かでも？」

「否や明日の用は親戚の方ぢやない。だが、親戚にも名告りを上げて居るのがあるよ。君知つて居るだらう、埼玉縣の早部を。」

「早部藤兵衛さんですか？」

「うむ、彼れあ僕の親戚でね、大分運動を頼まれて居るんだ。」

「慥話をして居る中に、秋ちやんがビールを二本袖に包んで、

「へえ、お待遠様。」

と歸つて來た。秋ちやんは〇〇辯護士の前に、赤いお盆に俯せた洋盃と麥酒とを置いて、

「先生、お殘餘を。」

と云ふと、

「殘餘なんか入ないよ。」

「何うも濟みません。」

秋ちやんはお辭儀を一つして引き退る。〇〇さんは早速手酌で一杯注ぐと、亭主が振返つて、

「オイ、誰かお酌をして上げる。」

高ちやんが私の袖を引張て、小聲で、

「あんた傍へ行つてお酌をしてお上げなさいよ。」

それが聞えたと見えて、〇〇さんは、

「さや、可う。僕は女なんかに酌をして貰ふよりか、手酌が好きだ。」
こんな事を云ふて、わざと手酌で飲みながら、

「ねえ君、僕あ感心に訴訟に強いよ。明治四十二年に大學を出てさ、出ると直ぐに事務所を開いて、それ以來僕が辯護して遣つて敗訴した事件はたつた一度切りだからね。一つは運も宜かつたんだらうが、兎に角是れでも法廷に起つては雄將だよ。だがその我輩が此處でかうして一杯遣つて居る事を知つたら、皆驚くだらうなあ。」

「皆よりも、奥さんに知れた方が餘程大變だわ。」

お女将さんが、軽く笑ひながら素破抜く。

全くだ、今夜は大森の宴會に行つてる譯になつてるんだからね。」

みんなが、どつと笑つた。

〔一二〕 肌身離さぬ紙袋

天下一品の番頭——資袋の謎——桃色の預金帳——花ちゃん一寸——内證話の聞き
耳——店の舞臺の秘密劇——つまらなさうな顔——けちなお客

そこへ又電話が懸つて來た。ちやうど電話器の下に坐つて居た〇〇辯護士は、

「よし、僕が出て遣らう。」

と直ぐに立つて、

「ハイ、手前がカフェー・ヤトナで。」

と黄色い聲を出す。聽て、

「お女將、茅場町の何とか云ふ運送屋で今夜祝宴をやつて居るから、別嬪で三味線の弾ける雇仲居を一人直ぐ寄越して呉れつて。承知したと云つて可いか。」

「何うも恐れ入りますね。では、直ぐ伺はせまつて、どうぞ。」

女將が笑ひながら頼むと、調子に乗つた〇〇さんは、

「何うも有難う。只今すぐにその三味線の弾ける別嬪の雇仲居を差出します。左様なら……。」

「何うだい女將、法學士で辯護士の雇仲居屋の番頭てのは、天下第一品だらう。」

新聞に素破抜かれるとは夢にも御存じの無い〇〇さん、一杯機嫌で甚くお得意の様子は、可笑しいやら、氣の毒やらで、私は噴き出したくなつた。聽て〇〇さんは真面目な態度で、

「だがね、僕もかういふものを始終持つてあるいて居なくちやならないんだから、少々遣り切れないよ。是れあ僕の寶袋さ。中を見せようか。」

酔ひに紛れて〇〇さんは、私が謎にして居た紙の袋を倒さに振ると、中からは書類や帳面のやうなものが、ばら／＼と出て散ばる。〇〇さんはその一つを取上げて亭主に向ひ、

「見玉へ、これは僕の貯金の通帳さ。」

と見せた。それは桃色の表紙に、〇〇銀行と印してある預金帳であつた

事務所もあり本宅もあり、歴とした奥さんもある紳士が、肌身離さぬ重要書類と銀行の通帳を持って歩いて居る！一體どうした謎なのであらう？！私には今以つて解せぬ。

表の扉がさつと開くと、花ちゃんの白い顔が現はれた。すると亭主が、

「花ちゃん、〇〇の旦那にお酌してあげな。」

〇〇の傍に坐つて、花ちゃんはお酌を初めた。

廳で女将さんの使で、雇仲居の一人が裏口から、三味線の弾ける雇仲居の家へ聘せに出掛けると、入れ違ひに店の扇が開いて、誰れかが来たらしい。女将は急いで降りて行つた。暫くすると、女将は上り口から顔を出して、

「花ちゃん、一寸。」

と、呼んで内密話をしながら、店の方へ連れて行つた。店へ来たのは誰？、そして何を話して居るのであらうと、聞耳を立てたが、例の樂屋式の部屋だから、店の舞臺で演ずる劇は一切見ることも、聞くことも出来ぬ。その中に花ちゃんが戻つて来た。高ちゃんが一番に、

「誰れ？ ちよいと。」

と訊く。

「何あに、お客様よ。」

と花ちゃんは不満なさうな顔。

「今からの座敷なら、何うせ平座敷ぢやないんてせう。」

「無論さうよ。なのに、あんな三圓を二圓にしるなんて文句云つてるのよ。」

と口を尖らせて云ふ。

「まあ、吝嗇だわねえ。」

「大吝嗇よ。あたし、あんなお客様は眞平だわ。」

憊う云ひながら、花ちゃんは艶な秋波をちらりと〇〇に送つた。

【二三】 更けて艶めく春の夜

看護婦あがりの女——情けふい交渉——身に沁む夜寒——一同を事務所へ——愚圖愚圖すれば大變——あとは野となれ——四晩續きのお座敷——街の柳に見送る影
聽て女將は又顔を出して、もう一人の雇仲居を呼んだ。その女の名はツ

イ忘れたが、看護婦上りと云ふた様子、下卑な女であつた。今度は交渉が纏つたと見えて、其雇仲居は戻つて來ると直ぐに帯を結び直して、そのまゝの服装で出掛て行つた。私は此時云ひ得ぬ情ない感じに打たれた。

雇仲居の夜は、次第に更けて行く。辯護士の〇〇さんは、漸々酔拂つて「是から一同を事務所へ連れて行かう」などと管を捲き始めた。私は追々に寒さは増し、お腹は空しくし、少々心細くなつて來た。この上其事務所とやらへ引つ張つて行かれては、それこそ大變、愚圖々々しては居られぬので、花ちゃんの袖を一寸引いて、

「花ちゃん私歸りたくなつたわ。貴女は未だ。」
と聞くと、

「然うね、私も歸つても可いわ。一緒に歸りませう。」

「えい、ぢや一緒にね。」

後は野となれ山となれ、私はそろ／＼立ちかゝると、〇〇さんは、

「おやく／＼、夫れぢや僕の方が前に歸るかな、花ちゃん如何だ、僕が送らうか。」

「何卒願ひますわ。」

其慶事には頓着なく、私はサツサと歸り仕度をした。〇〇さんは、

「女將ちよいと。」

と陰へ招んで、又何やら内密話、花ちゃんと私は構はず、

「左様なら。」

と歸らうとすると、女將は後から、

「花ちゃん、一寸お待ち。」

と呼び留めて、急いで下りて来て、何やら耳打ちを始めたから、私は故意と外して、門へ出て待つて居ると、やがて花ちゃんが、

「何うもお待遠様。」

と出て来たので、兩人は襟巻で包んだ肩を並べて、話ながら小川町の方

へと歩いて行つた。

「先刻お女將は何を言つたの。」

暫くしてから私は、斯う聞くと、花ちゃんは微笑んだ許りて、それには

答へず。

「私眞實に困るわ、だつて今夜で四晩ていふものお座敷へ續けて出るんてせう。でも、断れば悪いしね。」

恁様事を云ふて、ほつと溜息を突く。花ちゃんに、染々と種々なことを聞きながら、二人は何時か賑やかな小川町の通りへ出た。

天下堂の前まで来ると、花ちゃんは急に立止まつて、

「私、貴女にいろいろ話して置いて上げたいことがあるんだけど、何れ又その内緩くりね。」

恁う云つて左様ならをするから、

「あら、貴女一所の電車に乗る筈ぢや無かつたの？」
と訊くと、

「私、でも今夜須田町の方から歸らなくちやならないのよ。」

變な挨拶をして、花ちゃんはお辭儀をして、須田町の方へ向いて歩いて行つて了つた。恁麼に遅く何所へ寄るのだらうと、私は暫く花ちゃんの後影を見つめて居たが、突然けたたましい自動車の轍の音、私は急いで電車に乗つた。

カフェー・ヤトナの二日目は、斯くして何うやら無事に済んだが、さて明日は何のやうなことが起るのであらう。

〔一四〕心をきめて初座敷

連雀町の高等旅館——大丈夫は請合——自動電話——黒幕のTさん——存外の親切者——一金三圓也の受取——菊山さん——門に待つ母衣俵——

〇〇辯護士の白羽の矢に、勢からず當惑させられたので、その翌日は出掛けるのが聊か躊躇はれたが、と云つて折角の探検を只だ二日で中止にしては今までの苦心も水の泡と、又勇氣を起して出かけた。

午前十一時、例の裏木戸からこつそりと入つて行くと、亭主は女將さんと差向ひて火鉢の傍に坐つて居た。女將は私の顔を見ると、

「艶ちゃんかい、恰度宜い處へ來たわ、先きね、連雀町の△△旅館さんから電話でお座敷か掛つて來の。誰か呼びに遣らうと思つて居た處だから、貴女行つたら如何？」

「さうねえ。」

私は思案して居ると、

「あのね、雇仲居は一人と云ふ注文だけど、お客様は三人だつて云ふから大丈夫よ、それに晝間のお座敷だもの。」

女將は私が返事を躊躇つて居るので、大概その方を心配してるだらうと思つたらしく、亭主と顔見合せて笑ひながら言つた。

「私一人で大丈夫でしやうか？」

「大丈夫ともさ。貴女のやうに何時までも什麼事云つてちや駄目よ。」

出て見ろよ。そんな引込思案ぢや、雇仲居は出來ないぜ。」

亭主までが口を揃へて進めた。

「それぢや私出て見ませう。では奥さん私その前に一寸出かけて來ます。現途中で買物して忘れて來ましたから、大急ぎで行つて直ぐ歸つて來ます

わ。」

私は急いで表へ駆け出して、直ぐ近所の自働電話へ飛び込んだ。呼び出したのは新橋の五四〇。豫て黒幕に頼んであるT氏に出て貰つて、

「現マトナて斯々云ふのですが、如何しましやう。」

と相談すると、T氏は

「どうだねえ。」

と暫し考へて、

「まあ、一つ行つて御覧なさい。」

私は決心して、愈々出て見ることにして引き返した。

「女将さん只今。」

「遅かつたのね。いま又催促の電話だつたから早く出かけるやうにおし。」

私は隅の方で後れ毛を掻き上げて居ると、亭主が、

「早くしろよ、警察時間は十時からつてことになつて居んだから、そして先方で遅かつたと云ふたら、髪を結つて居ましたからとか何とか云つて置きな。」

見かけは恐いやうな顔をして居ながら、存外親切者と見えて、種々な世話を焼いて呉れる。

「では行つて参ります。」

と云ふと、女様は机の引出しから、料金の受取を一枚出して、金三圓、やとな賃金、右の通り受取申候也と亭主に書いて貰つて私に渡した。

「歸り際に是をお客様に出してお錢を戴いて來るのよ。都合でお帳場へ出して戴いて歸つても宜いわ。」

私はこれを帶の間へ仕舞つて、出掛けようとする、

「お待ち、艶ちやん、恰度旦那の車が來て居るから、一走り送つて行つてお貰ひよ、餘り遅くなつて悪いから。」

女將は親切にも下りて來て、表に待つて居た車夫を呼んで、行先を云ひ含めて、

「ては乗つてお出で。それから先方へ行つたらね、菊山さんと云つてお尋ねすると解るのよ、其方が招んで下すつたのだから。ぢや氣を付けてね、行つてらつしや。」

門に待つ母衣傳、その傳には向ひ近所の視線が絶えず注がれて居た。私は隠れるやうに傳に乗つた。傳夫は直ぐに握棒を上げて、傳は連雀町へと走りに走る。

〔一五〕 芋掘男の丹前姿

大膽の氣おくれ——式臺の出迎へ——緑色のスリツバ——不安な四疊半——三毛猫の田吾作
紳士——イヨオ入らつしやい——主筆殿の悪い評判——代議士の卵?

連雀町の旅館へと急ぐ傳上の人となつて、私の胸は俄に騒ぎ始めた。私を招んだお客とはそも什麼人?、お座敷とは一體どんなもの?そして私はその御座敷とやらへ出て如何にすれば宜いのかしら?、大膽に出掛けて

は来たものの、さて新しい此の試みに、私の胸はいたくも不安にかられた下手をすれば化の皮が剥げる。然う思つただけでも私の胸は躍るのであつた。

俣はチリーンと鈴を鳴して△△旅館の玄関先に着いた。式臺に出迎へた女中に、

「菊山さんと仰しやる方は居らつしやいますか。」

と聞くと、

「え、お出です。貴女は何方から？」

「あの錦町の〇〇から参りました。」

「あ、左様ですか。」

女中は直に點首て、

「では、何卒此方へ。」

と早速奥へ案内いて呉れた。鏡のやうに拭込んだ廊下を突き當つて、廣い階段を左へとんくと上ると、其處は新しい中二階で、正面の新座敷からは賑やかな話聲が洩れ、襖の外には緑色の上靴が三つ、横手の壁に帽子と外套とが二つ三つ懸つて居た。

女中は私をその室と反對の側の小座敷に通して、

「いまお客様のをうてすから、暫く此室にお待ちになつて居て下さい。」

と火鉢と座布團とを置いて行つた。そこは所謂四疊半で、壁に懸つた大きな姿見の前に紫檀の机を置いて、床の間には一輪差に紅椿が投げ込んで

あつた。細骨の障子が半ば開いて居る丸窓の外を、屋根傳ひに三毛猫が一疋うろく／＼して居るのを暫くぼんやり眺めて居ると、廳で襖が開いて、その猫に似た平べつたい顔の田吾作紳士が丹前姿で入つて來た。

「やあお待遠様、恁麼薄暗い室へ一人限りで淋しかつたらう。」
直ぐにベルを押して女中を呼んで、座蒲團を持って來させた。

「今、菊山さん處に客が來て居るもんだからね、何にその中に歸るよ、△は如何したかな、一つ此室へ呼んで遣らう。」

田吾作紳士は、立上つて又襖の外へ出て行つた。直に連立つて入つて來たのは三十五六の色の淺黒い、顔の長い、どんよりとした小さな眼を持つた男で、角帯を締めて居るが、商人でもなし、會社員でもなしと云つたや

うな服装。

「イヨ、入らつしやい。君は随分持たせませ。だから遂々菊山君の處へ客が來て了つたよ。」

どつかり坐つて、懷中から敷島の袋を取り出し、一本つまんで丹前の紳士にも進めながら、

「君、菊山の處に來て居るのはあれア誰だい。」

「あれか、彼は仙臺○○○新報主筆をして居るFといふ男さ。」

「あれがさうか。菊山はあんな男を信用するのかなあ。」

顔の長い角帯紳士は、嘆ずるやうに云つて、夫れから菊山さんの事を頻りに兩人で論じ始めた。あんな運動の方法では望みがないの、十萬圓が如

何したの、帳簿が何うのと云ふのを手持不沙汰に聞いて居た私は、

「あの菊山さんも矢張り今度代議士に出になるのですか？」

と突然言葉を挿ひと、

「否、左様ぢや無いよ。だが、矢張り未はさうなる玉子かなア。」

丹前の紳士は、かう言つて笑つた。

〔一六〕 後藤新平さんに似た男

知らぬが佛——仙臺の素封家——素的な好男兒——ふとした好奇心——不器用なお酌——國への土産話——「やとな」に恐縮するお客——和睦の印——つらい盃——

丹前紳士は、別室に居る菊山さんを代議士の候補者では無いと云つたの

て、私は、

「では菊山さんは何う云ふ方？」

と根を掘つて聞くと、

「貴女は大變菊山君のことを聞きたがるね。」

眞逆に新聞の材料にするとも云ひかねるので、

「でもこの菊山さんが私を聘んで下すつたんでせう。」

と莞爾すると、

「そんなに知りたけりや、教へて遣らう。菊山さんは仙臺の素封家で。事業家だ。そして女に惚れられる素敵な色男つ、眞實だねえ君、菊山は不思議に何處でも女に騒がれるねえ。」

丹前の紳士は角帯さんに相槌を求めると、

「眞實だよ貴女。菊山君は一寸風姿が後藤新平さんに似て居るね、盛に聲を張り上げるが、それで女には優しいんだから、貴女なんかも用心して掛らないと不可ないよ。」

仙臺の素封家で、何處か様子の後藤新平さんに似た菊山さんとは、そも什麼人？ 私は早く會つて見たいと思つたが、生憎彼方の座敷では客が却々歸る様子が無いと見えて、賑かな談笑が盛んに洩れて来る。

「君。酒にしゃらぢやないか、彼方の客は未だ歸りさうもないぜ。」
「うむ、そろく始めよう。」

女中を呼んでお膳を三つと、お銚子を二本運ばせた。

「時に貴女の名は何と云ふね。」

「私？ 私、つや。」

「では、艶ちゃんお酌。」

お銚子を持つ手は震へた。不器用な私のお酌の仕様を何と見たやら、丹前の紳士は、盃を口にしながら、

「艶ちゃん、君は代議士のお座敷に出たことがあるかえ。一體君達を招ぶお客は什麼お客だね。そして君達は招べば何處の待合へても來られるのか
So」

私は只黙つて笑つて居ると、傍から顔の長い角帯さんが、
「代議士には道樂者が多いから、無論招ばれるに定まつてらアね。だが、

何うせ田舎の議員さんが主だらう。此頃流行る東京の雇仲居を買つて見たよなんて、國へ歸つて土産話の一つにするのさ。奥の先生なんかもその連中てね、是非招んで見て呉れつて僕達に強望から、それで今日貴女に来て貰つた譯さ。處が僕達も實のところ、雇仲居は始めてだから、一向様子が解らないんだ。ま、一つ酌して貰はう。』

催促をされなければ、お酌をしやうともしない私を、随分不變相な、そして横柄な雇仲居だと、思つただらう。兩人の客は何處か私に窮窟相にして丁寧な口の利きやうをするから、

「貴郎方は大層私に恐縮して居らつしやるのね。」
と云ふと、

「全くだよ、何うも貴女は氣が置けていけない。も少し碎けて呉れなくちや。ては、さあ和睦の印に一つ上げやう。』

『もう澤山、私は黙目なんてすから。』

逃げやうとすると、角帯が私の手を捕へて、無理に盃を持たせ、丹前がその震へる盃に並々とお酒を注いだ。そして、

「さあ飲め、飲め。』

と両方から攻めたてられて、何うしても飲まない譯には行かぬ。詮方無しに私は盃を唇に當てて飲む振をして見せて、密とそれを盃洗の中へ捨てて仕舞つた。

二人はだんく酔拂つて來た。

〔二七〕 飛んだ所で同業者

怕ろしい不安——天機漏らすべからずだが——派手な職業——美術家？文士？——京橋の大きな新聞社——膽を冷やしたお客様——案外のおめでたさ加減——

さなきだに不謹慎極まる二人の紳士、此の鹽梅で酔拂つたら何を言ひ出すかと思ふと、たまらなく不安になつて来る。私は座蒲團の上に畏まつてちやんと膝に手を重ねて、催促がなければ決して酌もしてやらぬ事に決心した。酒は次第に二人の身體を酔はして行く。と、丹前が、
「ねえ、艶ちやん、貴女なんか様々な御座敷へ出て、毎日異つた人に會ふんだから、此のお客は如何いふ職業と云ふことが大概解るだらう。如何だ

僕達は何職業だか當たるかい。僕の方は見當が付いても此の男は鳥渡解らないだらう。』

と、角帯を指して云ふ。

「左様ですねえ、では當て見ませうか、貴郎屹度會社員。』但し砂糖會社の……と云いたかつたのを、ぐつと飲み込んで、

「それから此方は——さうねえ一寸見當が附かないわ。』

「では天機洩す可からずだが、少し話して聞かせるが、此男の職業は先づ派手で綺麗な職業。何うだ、それでも解るまい。』

丹前は鼻を蠢めかす。私は暫く首を傾つて居たが、

「左様ね、派手で綺麗な職業なら美術家か文士か、てなければ新聞記者か

しらっ。

獨言のやうに言ふと。

「オヤ〜。」

兩人は顔を見合はせた。

「當つて？」

「諾、貴女は却々眼が利くね。」

「では、美術家？」

「否、美術家だの、文士だの、そんな意氣な方ぢやない。貴女が一番後で云つた職業さ。」

角帯が眼をシヨボ〜させながら云ふ。

「へえ、ぢや貴郎は新聞記者？」

私は吃驚して眼を圓くした。雇仲居に化けた新聞記者が、同業の新聞記者に招ばれる、まあ何といふ奇愚だらうと、可笑しくもなつたが、夫より此の角帯さんが若私の正體を覺りはしないかと、急に不安になつたので、
「では何新聞に出てらつしやるの、教へて頂戴な。」

と疊かけて聞くと、

「何に、そんなに驚かなくとも可いさ、貴女達のことを素破抜いたりする三面記者ぢやないから。何新聞に出て居るかは、貴女の炯眼で序に當てて見給へ。」

「だつて澤山にある新聞ですもの、それは到底當りつこないわ。」

「まあ、當てて見給へ、京橋の大きな新聞社だから。丹前が興がつて云ふ。」

「それなら×××か、□□□か、てなかつたら○○○○？」

「是は驚いた、貴女は却々新聞通だね。」

通も通でないも、兎も角もそれ御飯を喰べて居るのだのにと、私は可笑しさを忍んで、

「ぢや貴郎は○○○○の記者ね。」

と念を押すと、

「遂々當てられて了つた。」

角帯は頭を搔きながら答へた。丹前も大變驚いて、

「イヤ貴女の眼の高いには全く教服したね、それなど常識が發達して居れば、少し勉強すると、貴女だつて女の新聞記者位にはなれるぜ。」

私は思はずひやりとした。雖然その心配は無用であつた。丹前は現在の眞物の新聞記者がつひ自分の鼻先に坐つて居るなどとは、夢更以てお氣が附かれず、厭に感服した顔附で、眼をとろりとさせて、じろくと私の顔を見て居るのである。角帯はと見ると、是も何の氣取つた様子もなく相變らず眼をシヨポくさせながら、天下泰平の御面色で、ちびりくと盃を干して居る。私は先づ安心と胸撫て下した。

〔二八〕 ノオトは私の懐中にも

迂闊な記者先生——女記者と女学校の先生——良妻賢母の御講釋——哀れつばい
聲——小説の材料——お相憎さま——帯の中から請取——

この角帯の紳士が新聞記者でありながら、私の正體に毫も心附かず只普通の雇仲居とのみ見て居る迂闊さは、失禮ながら職業柄にも似合はないと思つたから、料は戯談半分に、

「近頃は女の新聞記者さんが大分出來たのですつてね、女の新聞記者つてさふのは豪いさの？」
と枕けた顔で聞くと、

「それあ豪いさ。」

「ぢや、女学校の教師と何方が豪いさの？」

「さあ、何方かなあ。」

記者先生が鳥渡考へる振りをして居ると、丹前が横から口を出して、

「何と謂たつて女は良妻賢母に限るよ。」

「良妻賢母つて何——に？」

私は雇仲居らしい口吻で故意に訊き返す。

「これあ、貴女にも似合はぬねえ。良妻賢母を知らなくちや困るぢやないか。良妻賢母と謂ふのはね、まあ一杯注いで貰つてからにしやう。」

丹前は私にお酌の催促をして、ぐつとそり身になつて、得意然と良妻賢

母の説明を始めた。

旅館の奥座敷で、雇仲居に良妻賢母のお講義とは、大方此紳士の奥さんは餘程の良妻賢母で居らつしやるのだらうと、私はお腹の中で可笑しくて堪らなかつたが、疑つと辛抱して聞いて居ると、記者先生、

「君、そんな面倒な話は、もう止し給へ。説明して遣つたつて此女が良妻賢母になる譯ぢや無しさ、ねえ、艶ちやん。」

「本當にねえ、私なんかもう到底その良妻賢母とかにはなれつこはありませんわ。でも、私は一體此職業は餘り好かないんですの。讀めぬながらも字を讀む事は好きですから、私出来ることなら、少し勉強して新聞記者にてもなりたいわ。だつてねえ、此職業は、表面は暢氣相ですけれど、是て

随分辛い職業よ。」

と哀れつばい聲を出して見せると、角帯の記者先生は頷いて、

「全く左様だつてねー、貴女達の如な稼業をして居る婦人の暗黒面は、想像以上だつて云ふことだ。何うだい艶ちやん。一つ貴女の身の上話をして聞かせちや。僕の方の社に先達まで居た××と云ふ男は、貴女達のやうな女の、暗黒面を書く事が非常に巧かつたんだが、つい此間止したよ。僕は三面の方の係りぢや無いんだが、併し他日小説でも書かうと云ふ時、然ういう話を聞いて置くと、大に参考になるからね。」

生酔本性を違へずとやら、飛んだ處で職業を出す。

「え、それは話して上げてても可いわ。だけど今は駄目よ、貴郎は酔つ拂

つて居るんですもの。」

と私は巧く逃げやうとすると、

「何に酔つて居たつて大丈夫、懐に丁然と手帳を持つて居るから。」

お生憎様、手帳なら此方にも我持參！そして貴郎は私の身の上を聞いて、それこそ驚いて腰を抜かさなくちやならないと、思はず口へ出掛かつた。

丁度其時、宿の女中が襖の蔭から顔を覗かせて、

「貴女、一寸。」

私を呼ぶので、次の室へ立つて行くと、女中が、

「あのね、菊山さんがお客様と御一緒にもう直々御出掛になるのだ相です

から、貴郎に料金のことを訊いて呉れと仰しやいましたが……。」

「では、何卒これを。」

と私は女將の呉れた請取を帯の間から出して女中に渡して、

濟みませんけれど、貴郎から載いて下さいな。」

やがて、引つ返して、

「菊山さん處のお客様は未だお歸りにならないんですか、御一緒にお出かけになるつて本統？」

と、兩人に訊くと、

「そんな馬鹿なことがあるもんか、折角貴女を聘んで置いて、顔を出さないなんて怪しからん。よし、僕が行つて引張つて来る。」

酔の廻つた記者先生は、立上つて彼方の座敷へ菊山さんを連れに行つた。

〔一九〕 高麗屋張りの好男子

五十錢銀貨を六枚——ぎゆつと手首を——噂の色男——精養軒の支配人——學費を出して黒幕——それから住所と姓名とを——氣味の悪い人——三十六計——

角帯の記者先生が別室へ菊山さんを連れに行くと、入れ違ひに宿の女中が又顔を出して、後の方から密と私に、

「では、是で好んですね。」

五十錢銀貨を六枚渡して呉れた。

「何うも有難う。」

眞實に貰ふ可きでは無いが、去りとして受取らねば變に思はれるので、兎に角私はその金を受取つて、懷中から紙入れを出して納めて居ると、とりとした眼でちつと眺めて居た丹前が、

「オイ艶ちゃん、僕が一つ貴女の運勢を見て遣らう。手を出し。」

突然に手を伸ばして、私の左の手首を握つたので、私は驚いて振離さうとすると、

逃げなくたつて可いよ、何も何もするんぢや無いから。」

無理に私の掌を擴げさせて、

「ふむ、貴女は大分苦勞性だね、併し是からは大に開く運勢を持つて居るよ。」

などと、大道易者じみたことを云つて、首をひねる。其處へ襖が開いて記者先生が二人の紳士を伴れて入つて来た、二人共山高帽を冠つて、同じ霜降の駱駝の外套を着たまゝ、其處へ座る。一人は色白の血色の好い顔に、際立つて濃い眉と凛々しい眼とを持つた、苦味走つた幸四郎張の好男子で年断は三十二三。私は此の人が噂の主の菊山さんだらうと思つた。もう一人の紳士は、三十五六の瘦ぎすな、色の蒼白い。間の伸びた馬顔の、てれりとした、其癖いやに高慢ちきな氣取つて居る、頗る氣障な紳士であつた。

「艶ちゃん、さあ貴女がお待兼の菊山さんを連れて来たぜ。何うだ、好男子だらう。それから其のもう一人の旦那は、精養軒の支配人で、乃原さん

とおつしやるんだ。以後御最負にと頼んで置き給へ。」

記者先生、道化混りに紹介の勞を取る。私は、

「何卒宜しく。」とわざと丁寧に頭を下げると、乃原さんは、ふんと鼻であしらつて、乙に濟まし、オホンと顎を撫てない許り。私は何て氣障な旦那様だらうと思つた。

一同の暫く黙つて睨めつくらをして居ると、丹前が思出したやうに、

「あのねえ菊山君、此姐さんは大層眼が利くから、僕が、貴女は少し勉強したら女の新聞記者位には成れると云つたら、是非勉強して豪くなりたいと云つて居るんだが、如何だね、君一つ學資を出して黒幕になつちやア。」

菊山さんは豪傑風な笑ひ方をした。乃原さんは帯の間から金時計を出して見て、

「君、そろ／＼出掛けやうぢや無いか。」

「これから何方へ？」と先生が聞く、

「なかに、帝國ホテルでつまらない宴會があるのさ。行きたくもないんだが、猶且一寸顔を出さないと悪いから。」

立ち上りながら、聞いた風のことを云ふ。菊山さんも一所に立つて、

「ぢやあ、君達は先あ緩然して居たまへ。では、姐さん、又逢うね。」

私にも挨拶を残して出て行かうとして、菊山さんは急に振願つて、

「あ君、その姐さんの住所と名前と能く訊いて置いて呉れ玉へ。」

記者先生に恚う云ひながら、私の方を向いて、にやりと笑つて襖の外に姿を隠した。

丹前がつと立つて送つて行くと、後に残つた角帯は、

「艶ちゃん、貴女の家は何處だ。」

「私の家なんか云つたつて、仕様がないわ。」

「だつて、菊山君が訊いて置けつて云たんだもの。」

「菊山さんは聞いて何うなさるんでせう？」

「何にするんだか僕だつて知らないさ。だがね貴女。」

先生いやに聲を低めて、

「菊山君はあれで決して夜は獨りて居られない男なんだからね。大方貴女

「今夜もう一度此家へ来るつて云ふ譯なんだらうさ。」
 變な眼眸をして、それから何んだか薄氣味の悪い事を云ひ出した。丹前
 は、先刻菊山さんを送つて、出た儘歸つて來ない。私は薄暗い室に酔拂ひ
 と何時までも差向ひて居るのが急に心細くなつたから、そろ／＼引揚げや
 うと身繕ひをして、

「私一寸階下へ行つて、電話を掛けて來ますから……。」

未だ何やらくどく／＼管を巻いて居る角帯を一人、置いて來抛にして、さつ
 さと階下へ逃げ出した。

〔110〕 銀貨に注ぐ冷たい眼と眼

お可哀 相な菊山さん——お料金は戴いて來て？——大威張の當はづれ——變な笑ひ——飛
 んだお尻ぬぐひ——小切手は眞つ平——芝居のお供——

角帯の記者先生を一人奥座敷に置いて、階下へ降りて來た私は、旅館の
 女中には、急に用事が出來たからと言ひ残して、そのまま、連雀町の佐々
 木旅館を飛び出した。表へ出て始めて、先づ什うやらお座敷も無難に切り
 抜られたと、ほつと一息。夫にして、可愛想な菊山さん、取り巻の角帯
 や丹前に煽動られて招んだ雇仲居が新聞記者の化者と、後で知れたら、甚
 麼に吃驚されることやら。思へば罪なことをしたと、湧き來る可笑しさを
 獨り袂に忍ばせながら、錦町のカフェー・ヤトナへと足を急がした。
 歸つて見ると、例の樂屋式の室には、見知らぬ顔の雇仲居が二三人坐つ

て居る。女將は恰度電話の前に立つて居たが、私を見ると

「おや艶ちゃん歸つたの。大分手間が取れるから、今電話を掛けてお座敷を外させて上げやうと思つた處よ。そして貴女お料金は載いて來て？」

「えい、載いて來ましたよ。」

三圓の銀貨を大威張で女將の前に出すと、何う云ふ譯か、雇仲居達の視線が女將の顔と銀貨とに等分に注がれた。女將はそんなことには頓着なく「ぢや、勘定をして上げなければならぬけど、兎に角一應預かつて置かうね。」

懐かち黄色い縞の財布を出して、その中へ銀貨を收つて、又懐中へ入れると、其儘立つて洗し許へ下りて行く。後見送つた雇仲居達は眼と眼を見

合はせて、變な笑ひやうをしながら、急に低い聲で内密話

「ちよいと、貴女お勘定は既う全部貰つて。」

一人が聞くと、

「何うして、まだ半分も貰つちや居ないのよ。だから今なんかもうお湯錢もありやしないわ。」

と一人が不満な相に答へる。

「此頃は此家は酷く工面が悪いのねえ。営業停止の祟だの、女將さんが拘引られたお尻までがみんな私達に祟つて來るんだもの、堪まらないわ。」

「本當にね、働いたつて張合がないのね。」

全くだわ。そして稀々拂かと思へば、旦那が小切手なんかで呉れるんだ

もの。』

「すあ、貴女にも小切手で。妾もよ、全くあれは困るわねえ。五十圓と百圓纏つたお金ならだけれど、たつた三圓、五圓のお金を小切手で一々銀行へ貰ひに行くくらゐ體裁の悪い事は無いわ。』

頻りに皆で不平して居ると、女將が用事を済して上つて來たので、私は「先づ此家を引揚げやうと思つて、

「奥さん、私今日は芝の親類に少し用がありますから、是で歸りますわ。」と立ち掛る。』

「さう、ては明日又早くも出て。あゝそれから艶ちゃん、貴女此の十四日(二月)にお芝居に行つては如何？實はね、昨夜の〇〇さんが今朝から幾度

も電話を掛けてきてね、何うしても貴女を一度招びたいつて嚴しく仰しやるから、私、それぢや明後日石崎の『澤の鶴』の歌舞伎の總見があるから、寧ろお芝居にでも連れてらして、その歸りに何方かへお寄りになつたら可いてせうと云つたのさ。左様したら、ぢや連れて行くと云つてらつしやるのよ。お料金を戴いてお芝居が見られれば恁麼結構なことは無いよ。それにあの旦那は、辯護士さんでも却々羽振の利く方だし、決して益にならないお客ぢやないわよ。』

と諭すやうに話した。思へば女將も親切である。私は返事に困つて、
「では、能く考へて、後からお返事致しませう。』

と好い加減にお茶を濁して、カフェーヤトナを出た。表へ出ると早速最

寄の自働電話へ入つて、京橋の二三二四番を呼び出した。

〔二二〕 分け前髪の薄化粧

木挽町の乙女俱樂部——作り聲の出鱈目——「やとな」に露路は附き物——大妻見の部屋——
黒敷上の男帯——隣室のお客——不思議な女の正體——

僅少の日とは云へ、カフェーヤトナへ化込の経験で、稍々大膽になり得た私は、勇氣の掛けぬ中にと、豫て噂さに聞いて居た木挽町の雇仲居屋、乙女俱樂部へも化け込んで見やうと、錦行のヤトナを出ると、直ぐ自働電話で呼び出した京橋の二千三百二十四番といふのは、即ちその乙女俱樂部の番號なのである。電話へ出たのは優しい女の聲、私は例に依つて、

「日本橋の方で、お母さんと二人暮して居るものですが、種々家の都合がありますので、少しそちらへ御世話になつて、雇仲居に出て見たいと思ひますが——。」

と作り言の出鱈目を並べると、

「では兎も角鳥渡入らして見て下さい。」

と云ふので、電話を切つて、直ぐその足で木挽町の乙女俱樂部へとお目見得に出掛けた。

須田町から電車に乗つて、銀座三丁目で降りた頃は、既う日は暮れかかつて、街の片側では夜店商人が忙し相に店を擴げて居た。菊屋の横を折れて、豊天橋を渡つた處と聞いたので、その通りへ來て見ても、一向それら

しい家も見當らないので、角の理髪店で尋ねると、若い男がわざ／＼表へ出て来て、それは此先の質屋の露地で、入口に山長事務所乙女倶楽部と書いた電燈が出て居ると教へて呉れた。雇仲居屋に露地は付きものとみえる私は可笑しく思ひながら、教へられた、その露地を入つて行つた。成程入口に山長事務所と記した丸い電燈が出て居て、その奥の格子戸造りの家に乙女倶楽部と書いた軒燈が懸けられてあつた。

格子戸の中には、女下駄が三四足と、男の下駄が一足脱ぎ揃へてあつて艶な笑ひ聲が盛に洩れて居たが、格子戸を開けると、直ぐ内からも障子が開いて、廿四五の分け前髪の女が顔を出した。

「入らつしやいませ。あの貴女は先刻のお電話の方ぢやありませんか。」

如才なく見て取つて、

「では何卒此方へ。」

と横手の開き戸をあけて縁側からお座敷へ案内て呉れた。其所は六疊の小綺麗な座敷で、片隅にはまだ新しい桐の箆筒と紅友禪の覆の懸つた大きな姿見、鏡臺などが置かれてある。床の間には琴が一面、柱には三味線。拭き込んだ長火鉢の傍には派手なメリンスの座蒲團が敷かれてあるなど、凡てが雇仲居屋の樂屋めいた飾り附けて、春の夜には相應しい媚めかしさも何處やらに偲ばれた。

分け前髪の女は、愛想よく私に番茶などを進めて、宜く入しつて下さいました。現一寸女將さんはお客様ですが、何もう直

きに歸りませよ。恁麼稼業をして居るといゝんな人が來ましてね、随分五月蠅のですよ。」

言譯らしく小聲で話す前分髪の女、薄化粧はして居るが、色の淺黒い口の大きい眉の薄い、そして濕みのある二重瞼の大きな眼を持つた一種特徴のある顔の女で黒縹子の襟をかけた銘仙の着物に、同じ銘仙の書生羽織、男のやうな黒八丈襦袢の衿口、黒献上の男帯といふ變つた服装をして居る私は妙な女！と奇異に思つた。

壁一重隔てた隣の室には、脱いてあつた男の主が來て居るらしく、賑やかな女連の笑ひ聲に混つて、時々何か訊ねて居るらしい低い男の聲も洩れる。隣の室の男客はそも誰？ として奇抜な服装の分け前髪の女の正體

は何？ 記者が乙女俱樂部へ化込の數日間には實にカフェー・ヤトナより以上の奇なる事實と、珍なる事件に邂逅した。

〔三二二〕 禪學「やとな」の黒猫

錆のある聲——弱い稼業——睨み付ける——隣の部屋——イヨオ下京ッ——聲色まじりの巫山戯——學校で禪學——妙な仇名——畜生ツ警察の犬！

乙女俱樂部の小意氣な座敷で、分け前髪の變つた女と話しながら、私は壁一重隣の室の男客の歸るのを待つて居ると、廳てその室から低い聲で浪花節の眞似をしながら、島田に結つた肥つちよの二十一二の女が出て來た。

「ちよいと綾ちゃん、未だ歸らなすの。」

分前髪は隣の室を願て提して、

「随分長つ尻ね。」

と小聲で云つて、眉を顰める。綾ちゃんと呼ばれた肥つちよは私に一寸會釋して、火鉢の傍にべつたり。

「ねえお染さん、四時に來て、五時、六時、七時と既う三時間だわ。その間、同じやうな事ばかり執渾く聞いて居るんだもの、あれぢや姐さんだつて全く遣切れないねえ。」

綾ちゃんは太い錆のある聲で云ふ。

「本統に好い加減にして歸れば宜いのになえ。」

分け前髪は呟くやうに言つて、

「弱い稼業だと思つて、何處までも酷めて掛らうとして居るんだよ。綾ちゃん、妾や彼あいふ風に出られると、もう黙つちや居られない性分よ。だから先刻も餘り口惜しかつたから、思はず齒をぎりぐり噛んで睨み附けて遣つたのさ。そうしたら、姐さんが横から無暗と妾の袖を引つ張るんだもの。」

と口惜し相に、最ど大きな二重脛を又一層大きくして、隣の室を睨み上げた。

「イヨ一下京ッ！」

綾ちゃんが黄色い聲で大向をきめる。

「人、馬鹿におして無いよ、此人は。」

分け前髪は、笑ひながら綾ちゃんあやちゃんの肥り肉ふよな膝ひざをびしやり。下京しもみやうつて一體何なの事ことだろう？と洒落しやれの番地ばんぢを考へて居た私わたしは、不圖思ふとひ當あたつて可笑おかしくもなつた。

色白いろしろで、丸顔まるがほで、ちよんびりとした八はちの字眉じまゆの綾ちゃんあやちゃんは、却々ひかくのお滑稽おこ者けで、そして大層物真似たいせうぶつまねが上手うまい。二人ふたりは頻しきりに燥せしいだ調子てうしで身振りみぶりや假聲混かはいまりに巫山戯ふざけ始めた。やがてお染そめさんが、

「ぢや綾ちゃんあやちゃん、お前まへさんは恁こういふ事ことが出来できるか。」

と立つて坐すわり直ただして、兩足りゆうあしを前まへに組くんで、本式ほんしきに胡坐あぐらを搔かいて見みせて、什なんなもんだいと云いつた顔かほをすると、綾ちゃんあやちゃんは有あ繋なに呆あれてその顔かほを見み

ながら、

「貴女あなたは何處どこまでも變かつて居ゐるのねえ、何なにんだつて又また那樣やう事ことを稽古けいこしたの。」

少ち少な眼めを圓まるくして訊きく。

「これかい、是これあね、妾わたしが學校がくかうに居ゐた時とき、ちつと許ほり禪學ぜんがくをやつたのさ。その時分じぶんには毎朝まいあさ斯かうして胡坐あぐらを搔かいてね、手てを組くんで眼めを閉しむつて、二時間位じふにじかんも凝ことして居ゐたものよ。もう長ながく遣やらないから、今いまぢや直ちきに足あしが痛いたくなつて駄目だめ。」

「ふうむ、恰まさで達磨だつま様さまみたいな真似まねをするのねえ。黒猫くろねこは猶なほ且かつ黒猫くろねこだけあつて違ちがふわ。」

綾ちゃんは首を振つて感心する。男作り！ 學校！ 禪學！ 黒猫！
私は益々この分前髪のお染さんが謎になつた。折から隣りの室では漸く客
が歸るらしく、人が座を立つ氣配がして、

『では、さう云ふ譯ですから、何分宜しく。』
と艶っぽい聲で言ふのが聞えた。

『おや、歸るやうよ。』

綾ちゃんが立上ると、お染さんも一所に立つて、二人は隣の室へ出て行
つた。女達はどや／＼と上り口へ送つて出やうとしたが、やがて格子戸が
閉つて下駄の音が遠退くと、

『畜生！ 警察の探偵ッ！』

疍走つた聲で怒鳴つたので、皆がどつと聲を上げて笑つた。
『お止し、お染さん。聞えたら大變ぢやないか。』
宥めるやうに云つたのは、艶っぽい聲の主であつた。

「二三」 乙女倶楽部の女主人

小意氣な女——遊藝人の鑑札——藝者屋の嫉視——野暮な素人臭い私——女將の信
任——此家の料金——今夜旦那は？

分け前髪のお染さんに警察の探偵と怒鳴られた男客が歸ると、艶っぽい
聲の主は隣の室から出て來た。色の白い、鼻筋の通つた、地藏眉の眼許の
仇な、二十四五の小意氣な女で、髪は櫛巻に、銘仙の着物に黒縞子の袷の

かいつたお召の半纏といふ服装。

「入つしやいまし。何も大變にお待たせしました。私が乙女倶楽部の女主人で御座います。始めまして。」

と丁寧に挨拶して、長火鉢の向うに坐つて、私にも座蒲團を進めながら「何うもねえ、恚ういふ稼業をして居りますと、種々な人が来ましてね。」と嫣然。女將は大層笑顔の美しい、そして愛想の宜い女である。

細い長煙管で煙草を一服吸付けて、

「なあにね、上野の池の端の雇仲居屋が無鑑札で営業して居たので拘引られたつて、此の間新聞に出て居ましたでせう。そのことで家へも警察から探りに寄越したらしいのです。でも私の方では普通の暖味な雇仲居でなく

仲居藝者として整然と遊藝人の鑑札を受けて遣つて居るのですから、別に差支へは無い筈なんですけど、矢張藝妓屋側から種々苦情を言つて突つつかのてせうよ。兎に角恚う云ふ職業をする者が増えると、藝者屋は随分違つて来ますからね。第一藝妓のやうでなく、少し位遠方からでも自由に聘べて、そして料金も倍載くつていふんぢやないのですから、藝妓よりは萬事がずつと便利でお手軽なのですもの。

と女將は仲居藝者の効能を並べたあとで、

「あの、貴女も仲居藝者をなさりたいつて、先刻電話たつたさうですつてね。失禮ですけど、ちつとは以前に何か爲つた事がありましたか？」

私は眞逆カフエーヤトナへ化迄んで、然も今日の前刻までお座敷へ出た

事かあります、とも云はれないから、

「否、始めてですの。」

と、態と極まり悪相に答へると、

「あゝ左様ですか。」

と女將は立上がつて、箆笥の上から少さな紙の営業案内を一枚取つて來た。

「私共では、今年の一月の十九日に始めたばかりで、未だ間が無いんですけれど、置いて呉れと云つて入らしやる方がもう随分あるんですよ。でも方々の雇仲居なんかを渡つて歩いた擦れつからし人は厭ですから、左様いふ方は皆なお断りして居ますの。それに私の方は主に住込で來て戴く事

にして居ますから、餘り氣心の知れない方は不安心ですし、中には帶や着物も全部此方持ちの方もあつてしやう、其様なのは全く相對の信用づくでお貸しするのですから、悪い女に掛つて出先から其儘フイと逃げられて了へば、それまでですものね。それで成可く素人の餘り擦れつからして無の方をと思ひましてね、只今の處では氣心の知れた人達許りを、ほんの四人程置いて居るのですが、追々人も殖したいと思つて居ますの。」

下町風に氣取つて居ても、何處かに野暮な素人臭い私が却つて女將の信用を買つたと見えて、何やら此處へ置いて呉れさうな口吻。

女將は私の前に営業案内を擴げて、

「これに営業時間と料金も書いてあります。一時間以内が一圓、五時間ま

てが二圓、十時間までが三圓、十五時間までが四圓で、他の雇仲居屋さんなどは等級が分けてあるそうですけど、私共では別にさう云ふ規則は定めてありません。それから分合はね。」

と女将さんが未だ話し続けやうとする時、隣りの室から綾ちゃん顔が覗かせて、

「ちよいとお春姐さん、今夜旦那は入らつしやるの？」

〔二四〕 男の聲で呼出し電話

時にどんなもんでげす——寶亭でも奢らせてよ——収入は半分——安く見積つても六七十圓——その邊はお覺悟——お座附は俄か稽古——

隣りの室から顔を覗かせた綾ちゃんに、今夜旦那は入らつしやるのと聞かれた女将は、

「さうね、何うだか分らないわ。お前さん一寸電話を掛けさいてお呉れよ相談があるんだから今夜は是非来て下さいつてね。後生だから。」

振願つて莞爾。

「又男の聲でも店の人に一杯喰はすのかい。よし来た。」綾ちゃん直ぐに壁に附けてある電話の前に立つた。

「下谷四△△三番」受話器を耳にしながら鳥渡首を縮めて、

「あー若しく、貴方は吉山さん。旦那居ますか、何に現出掛けました。」

「あー左様ですか、ては宜しく。左様なら。」

影で聞けば儘かに男としか思はれない、理由は自然に首肯される。綾ちゃんも電話を切ると此方の室へ這入つて来て、

「姐さんもうお出掛けになつたて。だから即刻に入らつしやるわよ、屹度時に仆麼もんでげす、僕の聲は。」

巫山戯て云ふ。

「うまいね、全く。恰て男だよ。あれぢや一杯喰はされる筈たわ。お前さんの聲も恚ういふ時には調法ね。」

「随分だわ、姐さん。那麼こと云ふと何んか驕らせるよ。」

「あ、驕るとも。現に旦那が入らしたつたら又賓亭でも驕らせて上げるわ。」女將は例の艶つばい聲で、笑ひながら、急に鏡臺の前に立つて往つた、抽

斗から眉刷毛を取り出し、鏡の中を覗き込んで、その刷毛に粉白粉を付けて顔をばたく。櫛で後毛を搔き上げると、又元の座に直つて、私に先刻の話の續きを始めた。

「それで歩合は、宅では住込みですから五分々々の割にして居ますの、食費は無論此方持ちですが、着物も此方持つてお上げする方ですと七分載きます、着物は此節の事ですから、何うしたつてお召の襲ねに、丸帯位でなくちやお座敷へは出られないしやう。お粗末でも全部一揃ひと云ふと幾何お安く見積つても六七十圓は掛ますもの、それを前借無しにお貸しする譯になるのですからね。」

と女將は七分三分でも決して取り過ぎてはないと云つたやうに謂ふ。私

は首肯うなづいて見せて、

「そしてお座敷は主に如何いふ家が多いのでせう。」

と訊く、女將は直に之に答へて、

「先あ主に待合、料理屋旅館さんなんかですが、又素人のお家の婚禮の御披露や、法事の御手傳などに招ばれることも随分ありますよ。然して私共では成可くは綺麗な御座敷許りて済ませたいと思つて居るのですけれど、何を云つてもお客稼業なのですから、左様ばかりも行きませんし、彼此の取沙汰位は免れられせんわ、貴女なんかもし入らして下さるやうなら、何卒其邊は宜しくお覺悟の上でね。一度斯う云ふ稼業に身をお落しになると、再た原の堅氣になるといふことは一寸六づかしいのですからね。」

女將は染々云つて、それから私の身の上などを仔細しく訊きながら新しく番茶を汲んで呉れて、

「でもね、今宅に居る連中は皆素人ばかりなんですよ。綾ちゃん丈は、以前義太夫藝者をして居ましたから、三味線も舞踊も些とは出来すけど、その他の人は駄目ですの、宅へ来てから漸とお師匠様へ通ひ始めた人許りだつて貴女、遊藝人と云ふのですから、是て些少は藝が出来なくちやねえ。」

と笑ひながら、

「でも、貴女なんか下地があたりになるてしたら、少しお稽古なされば、直にお座附位は弾けるやうになれますわ。」

女將さんは憊う云つて話しを切つた。先刻から大分賑やかになつた隣の室では綾やちやんが三味線を持ち出して、奈良丸くづしかなんかを陽氣に弾き出すと、皆が大きな聲で一所に歌ふ。

「ちよいと、ちよいと、静かにして頂戴よ、那麽に騒ぐと近所へ聞へて見つとも無いわよ。」

女將は隣の室を覗いて、美しい眉を寄せる。折から表の格子戸ががらりと開いた。

〔二五〕 眞夜中に何の騒動

お上さんに知れては大變——短氣らしい五分刈の旦那——不美人揃ひの長火鉢——不思議なお春姉さん——額の兩隅に人差指——いよく明日から——

表の格子戸が開くと、隣の室の女達は鹿馬騒ぎを止めて、上り口へ立つて行く。

「おや、旦那入らつしやい。」

「旦那、先刻、私お店へ電話をかけたのよ、又お女房さんに知れると大變だから、例の男の聲でね、旦那のお店の人は妾には何時でも一杯喰はされるのよ。」

綾やんが、げらく笑ひながら云ふ。聽て旦那と呼ばれた人は、此方の室へ這入つて來た。五分刈頭髪の背の高い瘦ぎすな、細面の氣の短さうな三十七八の男で、何處か相場師然として居る。女將は顔を見ると直ぐ、「あのねえ旦那、先刻警察の探偵らしい男が遣つて來てね、随分長い間種

んな事を訊ひて歸つたのですよ。それに就いて妾、貴郎に少し相談があるの。」

と、何だか秘密の話があるらしいから、私は座を外さうとすると、女將は、

「あら、貴女まあ緩然して居らつしやいよ。ては隣の室で少し話しなさいな。」

と云ふ。私はそれを機會に、隣の室へ立つて行つた。

其室に玄關の直ぐ次で、土藏の中に疊を敷いたやうな四疊半程の晝は薄暗相な狭い室である。階子段の脇の大きな戸棚の傍に小さな長火鉢が一個その火鉢を圍んで皆が坐つて居た。分前髪のお染さんと綾ちゃんの外に、

分廻しを掛たら耳だけが残ると云ひたいやうに満丸に肥つた顔の、島田に結つた十八九の女と、もう一人同じ年餘の餘り背の高い、少しお出額の、銀杏返しに結つた面皷顔の女とが居て、私が入つて行くと二人がお辭儀をした。丸い方がまる子さんで、面皷顔がちいちゃんだとは後で知つたこと。仲居藝妓と名稱は大層宜くても、一體に乙女俱樂部の雇仲居はカフエーヤトナの連中に較べると容色は皆なずつと下で、美人は女將さん一人その女將のことは皆なはお春姐さんと呼んで居るのも不思議である。

お春姐さんは、隣の室で旦那と頻りに内密話を始めた。お染さんは巻煙草の袋から一本摘んで煙らしながら、大分毛色の變つた奴が舞い込んで來たと許り、じろく私を眺めて居る綾ちゃんに、

「ちよいと綾ちゃん、今夜も亦遅くこれが始まるのぢやないかね。」
 人差指を額の兩隅に立て、見せて、

「毎晩々々、犬も喰はない喧嘩の仲裁は助からないね。」

「妾は今夜はもう什麼事があつ始まつたつて知らない顔で狸寝入をきめるよ、馬鹿々々しい。夜半最中まで起されて、彼處に騒ぎ立てられて、お堪りこぼしがあつたものぢやない。」

綾ちゃん頻に憤慨する。夜半最中に何んな事件が起るのだらう？ 私は知りたいたいの山々であつたが、それは明日のお楽しみとして、今夜は一先づこれ位で歸らうと、

「私もうお暇いたしますわ。」と云ふと、

「左様ですか。まあ可いぢやありませんか。ては姐さんを呼びますから。」
 お染さんが立たうとすると、隣の室から女將が聞き付けて、

「お歸りですか、仕方も失禮。ては先刻お話ししたやうな工合ですから、貴女さへお宜しくば、此方は明日からでも入らして下すつて宜しう御座います。それぢやお名前と住所とを鳥渡伺つて置ませう。」

私が例の名前と住所を名乗ると、

「何望お母さんにお宜しく。そして能く御相談なすつてね。」

女將は何處までも愛想が可い。私は、

「母も多分異存はありますまいから、ては明日から、御世話になりませう何卒宜しく。」

と云ひ残して、暇を告げた。

〔二六〕嘘で固めた身の上話

着換へを包んだ風呂敷包——もと私は京都生れ——母と二人で小料理屋——見學のための「やとな」——苛められた十七の花嫁——

乙女俱樂部への御目見得に無事に及第した私は、その翌日から早速、二三日住込んで見ることにした。午後の三時頃、着替を包んだ風呂敷包を抱へて、再び木挽町二丁目の露地の奥に、乙女俱樂部を訪ねると、今日は家内が大層寂然として居て、賑やかな笑聲も、三味線の音も、門には聞えて居ない。私は格子戸を開けて這入つて行くと、四疊半の長火鉢の傍で、女

將が只だ一人、針仕事をして居た。

「オヤ入つしやい。昨日は失禮致しました。」

膝から仕事を下しながら、

「お母さんは別に御異存はありませんでして？」

「え、それで早速お世話様に上りました。どうぞ、何分宜しく。」

私は挨拶して火鉢の傍に寄る。

「皆様は？」

「皆は今一寸出掛ました。錢湯やら髪結やらへね。お染さんは、今朝から用達に行つて未だ歸つて来ませんの。皆な随分お轉姿ですから、いまに貴女はお驚きになるでせうよ。」

と莞爾した。

女將は私を相當な堅氣の家の娘とも見て居るのであらう。何處か氣兼ねをして居る様子だから、私は態と問はれもしない身の上話を、眞實しやかに爲て聞かせた。自分の故郷は京都で、早くから東京へ来て育つて、両親共揃つて居た二三年前までは、相當に暮して居たが、父親に亡くなられて此方は、母親と二人で遊んで過して居たので、僅少ばかりの遺産は追々に減らす許り、何か小商賣でも始めては、と進める人もあるが、女手で堅氣の商賣は何うも思はしく行きそうも無し、それに一體自分は、陽氣なことの好きな性質故、いつも母親と二人で、小料理屋でも遣つて見ようと考へたが、夫にしては今迄が極堅氣に育つて来た爲め、客稼業の経験などは元

より無く、花柳界の消息もちつとも解らないから、見習ひの積りてまあ暫く自分でその社會の人になつて、料理屋や、待合の様子も少し知りたいと實は此方へお世話になることにしたのであると、染々物語ると、女將は始めて合點がいつたやうに頷いて。

「まあ左様ですか、私も上方には縁故の深い方なんですよ。私は東京生れですが大阪にも暫らく行つて居ましたの。ですから私の姉妹は、皆大阪で實業家に片附いて居ります。私も今は僦麼稼業をして居りますけど、以前は猶且堅氣としてね、私はこれで幼くから随分苦勞したのよ。」

と女將はつい釣り込まれて、針の手を運ばせながら、しんみりと自分の身の上話を始めた。

「今考へて見ると可笑しいやうですが、私十七の年に大阪から越後の田舎のお米屋さんへお嫁に行きましてね、なんでも仲人の話では夫婦二人暮しの、至極暢氣な家だと云ふことだつたのですのに、嫁つて見ると大違ひで舅も姑もあれば、鬼千疋の小姑までが三四人もあつたのです。でも私は来たものだから仕方が無いと諦めて辛抱する氣で居たんですのに、姑が大層妾を邪魔にしましてね、それあ随分酷められたのですよ、毎日は暗い中に小僧と一所に起されて、お米を選び分けさせられたり、時に依ると一斗二斗も這入つたお米の袋を擔がせられて、ひよろ／＼しながら近所へ持つて行つた事なんかもありましたわ。その時分の妾は眞實に慘憺でした、だから今でも私、お米屋さんの表を通ると、時々その頃の事を思ひ出させられましての。」

微に笑ひながら、その當時のこと思ひ出すかのやうに、凝乎と煙管を見詰めて、

「でもね、とう／＼私は辛抱が仕切れないで、半年程で其家を出たのです。それからね。」
と女將は猶も身の上話を續けようとする、其處へ丸ちやんが錢湯から歸つて来た。

〔二七〕 藝者を相手に競争

堅氣て暮すのは厭——藝者よりお手輕——仲間が多ければ心丈夫——遠謀深慮——お花
あるか——深切な人——綾ちゃんの義太夫——

お湯から歸つた丸ちゃんが、お化粧をしに次の室へと立つて行くと、女將は膝を進めて私に先刻からの身の上話の續きを話した。

「左様いふ譯でね、片附いた先のお米屋を逃げ出した私は、もう二度とお嫁になんぞ行くものかと、懲々しましたの、そして堅氣に暮すのが馬鹿氣て來ましたから花柳界へ這入つて見る氣になつたのです。でもね花柳界もさて這入つて見ると付うして傍で考へてやるやうな面白可笑しい事許りては無くて、却々これ辛い苦しい事が多いんですよ。私なんか初めの間は随分泣きましたわ。それが追々に馴れましてね、その中に世話をして下さる方が出來たものですから、矢張貴女と同じやうな考へを持つて東京へ來た早々淺草で小料理屋をやつて見たことがありますの。でも小料理屋と

いふ稼業は骨が折れて、資本が要る割合に儲からない商賣ですよ。それよりか同じ浮氣稼業でも、女の職業としては、私共の今の雇仲居の方が餘程宜うござんすよ。」

女將の話は諄々として盡きない。第一雇仲居は大して資本も要りませんし、其麼に骨が折れるぢや無し、それに雇仲居は藝者と違つてお手輕なと謂ふんで、昨今流行ものになつて居ますから、全く不景氣知らずですわ。恁麼割の宜い稼業は他にありませんよ。只警察の方の届が少し面倒なので昨日のやうに時々刑事に搜りに來られたりすると癪ですから、私今度はいつそ藝者の鑑札を受けて立派に税金を拂つて、家も烏森か新富町のもつと場所の好い處へ引越してね、一つ藝者の向うを張つて、公然で遣つて見よ

うかと考へてますの。それで實は、昨晚旦那にも烏渡相談して見たんですよ。藝者の税金を拂つたつて大丈夫儲かるのですもの。』

女將は雇仲の内幕を全部打明けて話した。而して私にも、

『てすから貴女も小料理屋をなさらうと云ふお考へなら、寧ろ此の職業になさいましょ。及ばずながら又御相談相手にもなりますわ。宜く世間では職業敵とか謂ひますけれど、私は那樣鄙吝な量見は持ちません。殊に此稼業は是から藝妓屋と競争して遣つて行かうと云ふのですから、一軒でも同業者の多い方が心丈夫ですわ。何うかまあ貴女も宅で暫く様子を御覽になつたら、夫からは御自身でお始めなさいましょ。妾なんか、此職業を始めるまでは矢張上野の雇仲居俱樂部へ一年程も出て居ましたの。それか

らは下谷の數寄屋町で初めて開業して、随分流行つたのですけど、藝妓屋側から苦情を持ち出して餘り面倒ですから、遂々此地へ引越して來ました其頃には私皆と一緒に座敷へも出て居たもんですから、現でも仕うかすると『お花居るか』なんて私の出て居た時の名を云つて、時々座敷を掛けて來るお客があつて困るのですよ。』

女將は大層打解けて、種々親切に云つて呉れるのであつた。其中に電燈がついて、丸ちゃんもお化粧を済して出て來たので、女將は膝の上の仕事を片附け始めましたから、私も手傳つて其室を掃き出したりして居ると、表から綾ちゃん、例の太い聲で義太夫を唸りながら歸つて來た。

『入つしやい。昨日は失禮。』

私に一寸頭を下げると、直ぐに火鉢の傍へ行つて、一服。

「姐さん只今。黒猫は未だ歸らないの？」

と、臺所の方へ往つた女將に聲をかけた。

〔二八〕 廊下で半分程の八百長

黒猫はまだ？——赤坂の例の所——せめて二三本——氣のきかないお客——御婚禮や法事の席——華族のお座敷——傳夫のうは前——

髪結から歸つて来た綾ちゃんに、「黒猫はまだ歸らないの」と、聲をかけた。勝手許から出て来た女將は、

「如何したんだか、まだ歸つて来ないのよ。」

と一寸ふり返つて云つた。

「ぢや六時からのお座敷は私が代りに行かなくつちや成らないかねえ。黒猫つていふ名差しなんだから、成可くお染さんが行つて呉れた方が可んだけれど。」

綾ちゃんは結立ての鬢を圓つこい手で一寸觸つて見た。女將は火鉢の傍に来て坐りながら、

「大抵は赤坂の例の處だらうと思ふんだけど、判然行つた先が解らないから仕様が無いわ。」

「黒猫が愈々歸らないんなら私、夫まで又大急ぎで實家へ行つて着物を取て来るわ。屹度もう出来て居るだらうから。」

立ちかかつた綾ちゃんは又坐つて、

「だがねえ姐さん、夜の六時から向島のお座敷ぢや、實際餘り下さらな
いわよ。だつて歸りは幾何早くたつて十時でせう、表へ出て寒い河風に、
びゆうく吹かれて御覽、全く縮み上るから、せめて寒いから些と飲んで
お出つて二三本も飲ませて呉れりや、又つてこともあるけどね、那樣氣の
利いたお客様やお帳場は滅多にありやしないもの。」

綾ちゃんは少々遣り切れないと云つたやうな顔をする。

「贊澤云つてるよ此人は。何んかと云ふと、飲むこと許り考へて居るんだ
わねえ。」

女將は笑ひながら云つて、急に眞面目な顔附になつた。

「だが綾ちゃん、お前さん眞逆お座敷のお座敷なんかで、無暗に飲んだく
れたり爲やしなからうね。眞個に氣を附けて頂戴よ。乙女倶楽部の看板に
かゝるから。」

嚴かな調子で云ふ。

「大丈夫よ、姐さん、お屋敷のお座敷では呑んでくれようだつて、到底も
飲んだくれられやしなわ。左様然らば、一同が改まつて居らつしやる
御婚禮や、法事の席で、奈程私が呑助だからつて、眞逆一人てぐいぐい遣
られる譯のもんぢや無しさ。でも、然う云へば先達つて、麴町の△△様の
お屋敷のお法事に聘ばれて行つた時は可笑しかつたわ。お越になつたお客
様は皆お歴々の華族の御前様ばかりでね、それこそ皆様が畏まつて召上つ

て居らつしやるんだから、妾が奈程足を搦木にしてお酌して廻つたつて、綾ちゃん一杯遣らうなんて云つて下さる方なんかありやし無いだらう。生憎寒い日てね、私は一杯呑みたくつて堪らなかつたけど、仕方がないから凝と辛抱して居たのよ、その中に一寸用事が出来たから、急いで内玄関まで出て行くと、私を乗せて来た俵夫さんが顔を出して、

「姐さん濟まないが、餘り寒いから、八百長を一本。」

て頼むから、早速お臺所へ行つてお料理番に、熱いのを一本燗けて貰つてね、それを持つて来て遣る途中で、遂々私が又それを半分程お廊下で八百長して遣つたのさ。」

「ぢやお前さんは、俵夫さんの上前を奪ねたんだね。」

「まあ左様よ。」

「いけ好かないね、此人は。見つとも無いぢやないか。若し誰かに見附けられたら、お前さん何うするの。だから、私が氣を付けてお呉れつて云ふんだよ。」

女將は嗜めるやうに云つて、簪で頭を搔きながら苦笑する。やがて、

「あゝ、さうく、綾ちゃん、お前さん此間の晩、黒猫と一緒に、遅く大層酔拂つて歸つて来たね。あの晩はお前さん達二人で、歸りに何處かへ引の掛つたんだらう？」

女將は、ふと思ひ出したやうに聞いた。

〔二九〕 大根河岸のおでん屋

向島のお座敷へ行つた晩——人形町の洋食屋——小意氣な家——やつと赤電車——
姉さんの千里眼——彌造を極め込んだ女客——

女將に、先達つての晩黒猫と二人で、遅くに歸つて來た時は、屹度何處かへ引掛つて居たのだらうと詰られて、綾ちゃんは、

「何時？ 此間矢張り向島の御座敷へ行つた晩？」

「あゝ。」

「別に何處へも引掛つて居やしなかつたわ。」

「嘘々、陰したつて駄目、私の方には確乎と證據が擧がつて居るんだから

確か貴女ん處の人だと思ふんだけど、前髪を分けた是々の女と、島田に結つて紋附の羽織を着た女とが、人形町の水天宮様の傍の西洋料理屋で、夜遅くに酷く聞こし召して居たやうだつて、態々知らせて呉れた人があつたんだよ。何うだい、恐れ入つたらう。」

女將は態と強面で責めつけると、綾ちゃんはくすくす笑ひ出して、

「那樣に證據が擧がつて居るんなら、白状するけど、その代り私が喋つたつてお染さんに云つては困るよ。實はね、あの西洋料理は私が餘程前から見附けて置いたの。小さな店だけれど、鳥渡小意氣な家てね。恰度此間は歸りが滅法寒かつたものだから、ちよいと寄らうぢや無いか、あゝ寄らうてな譯で、人形町で降りてとらう二人で寄つたのよ。」

「そして一體何程飲んだの？」

「二人でビールを一本と、お酒を二本よ。」

綾ちゃん、數を指て女將に示して、

「私はそれ位飲んだつてちつとも何うも無かつたけど、黒猫は全然酔拂つちまつて動かなかつたには閉口したわ。電車が無くなると大變だからつて無理に連出したら、途中でも、『有難いねッ』なんて黄色い聲で、無暗に浮れてね、やつと赤電車に間に合つたのよ。それから京橋で電車を降りるて又……。」

話しかけて綾ちゃんは急に口を噤む。

「京橋で降りて、夫れから如何したの。まあ何處かへ寄つたんだらう。て

なきあ彼處に遅くなる筈が無いわ。ああ既う隠さないて全部白狀してお仕舞ひッ。」

女將さんは、私と眼を見合はせながら、可笑しいのを我慢して、綾ちゃんを睨める。綾ちゃんはすつかり閉口して、

「姐さんの千里眼には敵はないわ。ぢや云ふけれど、でも少し極りが悪いねえ。」

「氣取らないで早くお話しよッ。」

「だつて姐さん、大變な處へ行つたんだもの。」

ぢや思切つて話さうか、あのね京橋で電車を降りるとお染さんが、些し酔を醒まして歸らうぢやないかつて云ふから二人で、橋の上に行つて暫く立

つて居たの、するとあの讀賣新聞の側の河岸端の暖かい場所にね、おでん屋の屋臺店が出て居たのよ、お染さんが其店を見附けて、ちよいと綾ちゃん一つ彼店へ喰べに這入らうぢや無いかつて云ふから、妾が、宜しい行かうてんで、早速其おでん屋へ又出掛けたのさ。』

「大根河岸のおでん屋へ二人でかい？　へえ、豪氣なもんだね。』

女將は呆れて眼を圓くする。綾ちゃんはもう破れかぶれと云つたやうな調子で、

「ねえ姐さん、妾自分のことだから解らないけど、あの時のお染さんの態度たら全くなかつたわ。何しろ頭髮が分前髪なんてせう。それにお召の着物に丸帶姿と云ふ服装で、手を斯う云つた鹽梅しきにしてね。』

と綾ちゃんは懐に手を入れて彌藏を造らへて見せて、

「今晚は、とお染さんが暖簾を潜つて、ぬつと顔を出すと、其後から私が島田に紋附の羽織で、一所に顔を出したもんだから、おでんやの女房さん面喰つて、眼をきよろ／＼させてたわよ。』

女將さんと私は遂に辛抱しきれずに、お腹を抱へて失笑して了つた。

〔三〇〕女だてらのコップ酒

お腹の皮——洒落者の女房——コップで三四杯——好い度胸——八の字眉を愈よ八の字——賄賂のネーブル——誰の惚氣——たんとお焼き——

お座敷の歸りに、赤電車から降りて、黒猫と二人で大根河岸のおでん屋

の縄暖簾を潜つたといふ綾ちゃんの話が、餘り振つて居るので、女將と私
はお腹の皮を擦らせて居ると、綾ちゃんも一所になつて笑ひながら、

「處が姐さん、その又ちてん屋の女房が鳥渡洒落者てね、とうふの親類近
くの他人、へい温かいほやく、なんてお豆腐のおてんをお皿に載せて出
したりするものだから、お染さん全然其の女が氣に入つて了つて、また其
處で二人が洋盃酒を三四杯引かけたのさ。だから彼様にへくれけになつて
歸つたのよ。仕方だ驚わたらう。」

「全く驚いたね、お前さん達の度胸の宜いにや。呆れたもんだ。」

女將は熟々呆れたと云つたやうに、綾ちゃんの顔を見上げて、

「私も何れ何處かへ寄つたには違ひ無からうと考へて居たけど、眞逆に大

根河岸たあ思はなかつたよ。好し、現にお染さんが歸つたら、澤山と油を
絞つて遣るから。」

「あらッ、お止しよう姐さん。どうぞお願ひだから夫丈けは勘忍してお呉
れ。」

綾ちゃんは八の字眉を愈々八の字にさせて拜む眞似をする。

「だつて爲方があるものか、お前さんが自分で喋つたんぢや無いか。」

「でもお染さんと、姐さんには決して云はない事つて約束がしてあるんだ
もの。私お染さんに怒られるわ。」

と半泣きになる。

「そんなら何んか賭賭でもお寄こし。」

「あ、宜ろしい。恰度好いものがあるから。」

綾ちゃんは袂から紙に苞んだ大きなネーブルを一個出して、

「和睦の印に、ちやこれを喰べやうね。」

と小刀で四つに切つて、女將に一つ、私に一つ、自分も一つ取つた。

「只たネーブル一切れの口錢なんて厭なこつた。」

女將は笑ひながら皮を剝いて、喰べ始める。

「でも大層美味しいネーブルだこと。綾ちゃん、その残つて居るのをもう

一切れ私にお呉れ。」

「あ、可いとも、その代り私の願ひも聞いて呉れるだらうね。」

「特別を以て聞き居けて遣はすよ。」

女將は手に取つたネーブルを綾ちゃんに見せ閃かして、

「これあね、餘り甘味いから、納つて置いて、いまに私の好い人が來たら

喰べさせるのさ。」

「仕うも御馳走様ッ。」

「え、澤山お嫉きなさいだ。一つ私が嘗めて置いて遣らうか、左様する

と彼の人が餘計嬉しがらるから。」

女將は、巫山戯て、赤い舌でベロ／＼蜜柑を嘗めながら隣の室の戸棚

の中へ納ひに立つた。

「そつちより此方のはうが幾何呆れるか知れたもんぢやない。」

綾ちゃんは獨言のやうに言つて立上ると、